

研究開発実施報告書

平成 26 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 3 年次



平成 29 年 3 月

国立お茶の水女子大学附属高等学校

はじめに

お茶の水女子大学附属高等学校長 村田 容常

本校がスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業を開始して3年が経過しました。本校は、従来から社会に有為な教養高い女性の育成をめざすという理念のもと、生徒の自主自律を重んじた上で、小規模の女子校という特徴をいかし、課題探究型の教育を行ってきました。お茶の水女子大学とともに高大連携事業も他に先駆けて開発してきました。これらの実績をさらに発展させ、女性グローバル・リーダーの基礎を築くために「女性の力をもっと世界に 目指せ未来のグローバル・リーダー」という目標をかかげて、本校は SGH 事業を実践してきました。昨年度は実施した2年間を振り返り、当初の予想と異なる点や実施上の問題点を洗い出しました。その結果を受け、3年目を迎えた本年度は、高校生の負担過多にならないように注意を払い、小規模な本校でより効果的に事業が行えるよう、相当の修正を行った上で全教員が積極的にかかわる SGH 事業に改編しました。本冊子をご覧になると、その辺りの苦労もお分かりいただけるかと思えます。

2017年4月に入学してくる生徒が3年生の時にはSGH事業は終わっています。年次進行を考えると、終了後どのように次の事業につなげていくのかということを考え始めなければならない時期になりました。4月に入学してくる生徒が3年生になった時どうするのかを考えておくことは当然としても、苦労して作り上げてきたものをその後どのように本校の教育課程の中でつなげていくのか、予算が伴うものはどうすればよいのか、予算が捻出できない場合は何をどこまでどのように残すのか等々、考えるべきことは多数あります。本年は中間評価の年で、本校の評価は良好なものでした。本事業を実施推進してくれた生徒ならびに指導した教員の奮闘に敬意を表するとともに、本校のSGH事業を支援してくださった関係各位には、厚く感謝申し上げます。しかし、SGH事業が成功したかどうかの本当の評価は、この事業の中で育った生徒が、今後の社会の中でどのように活躍するかにかかっています。本校を巣立った生徒たちが10年後、20年後にグローバルに活躍することを楽しみに、全教員がSGH事業そして日々の教育活動に精勤しています。不十分な点は多々あるかと思いますが、忌憚ないご批判をいただき、よりよき教育課程に改良していく所存です。

重ね重ね本校のSGH事業推進のためご協力いただいた多くの関係の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、今後とも一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

目 次

I	平成 28 年度 SGH 研究開発完了報告書	3
II	平成 28 年度 SGH 研究開発の成果と課題	11
III	実施報告書	13
1	研究開発の概要	13
1.1.	研究開発の概要	
1.2.	本年度の研究開発の経緯	
2	課題研究グループの取組	15
2.1.	1 年次必修「グローバル地理」	
2.2.	2 年次必修「持続可能な社会の探究 I」	
2.2.1.	「生命と環境」領域	
2.2.1.A.	経済発展と環境	
2.2.1.B.	生命・医療・衛生	
2.2.2.	「経済と人権」領域	
2.2.2.A.	国際協力とジェンダー	
2.2.2.B.	国際関係と課題解決	
2.2.3.	「文化と表現」領域	
2.2.3.A.	情報技術と創造力	
2.2.3.B.	音楽のグローバル化	
2.2.3.C.	言語に依存しない情報発信	
2.3.	3 年次必修「持続可能な社会の探究 II」	
2.4.	研修活動	
2.4.A.	イオン アジア・ユースリーダーズ	
2.4.B.	台湾研修	
3.	教養教育グループの取組	45
4.	連携・評価・発信グループの取組	53
4.1.	取組の概要	
4.2.	生徒の意識調査（質問紙調査）の結果及び分析	
5.	次年度以降の課題及び改善点	59
IV	関係資料	60
1.	目標設定シート項目の実績	
2.	運営指導委員会（第 1 回記録, 第 2 回要項）	
3.	SGH 意識調査〔アンケート項目と集計結果（抜粋）〕	
4.	教育課程表	
5.	組織図	

I 平成 28 年度 SGH 研究開発完了報告書

(別紙様式 3)

平成 29 年 3 月 31 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都文京区大塚 2-1-1
管理機関名 国立大学法人 お茶の水女子大学
代表者名 室伏 きみ子 印

平成 28 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 28 年 4 月 28 日 (契約締結日) ~平成 29 年 3 月 31 日

2 指定校名

学校名 お茶の水女子大学附属高等学校

学校長名 村田 容常

3 研究開発名

女性の力をもっと世界に ~目指せ未来のグローバル・リーダー~

4 研究開発概要

昨年度までに整備した全教員で取り組む実施体制のもと、本年度は教育課程を変更し、学校設定科目 1 年次必修「グローバル地理」、 「総合的な学習の時間」 2 年次必修「持続可能な社会の探究Ⅰ」、 3 年次必修「持続可能な社会の探究Ⅱ」のカリキュラム開発、及び確かな基礎学力と広い教養の涵養を目指す「教養教育」の教育課程の研究開発を行なった。

「持続可能な社会の探究Ⅰ」においては、多様な探究テーマの設定を可能にするため、3 領域 7 講座を置いて専門家の特別講義やフィールドワークを実施し、その成果を論文にまとめた。「持続可能な社会の探究Ⅱ」においては、より高次の協働的な学習を通して 2 年次の探究テーマをさらに深め、その成果を英字新聞にまとめた。海外研修においては、意欲と能力のある生徒が全講座から参加できる形に変更し、3 泊 4 日の台北研修を行った。また、3 月には成果発表会(兼公開教育研究会)を実施した。

テイ等において円滑なコミュニケーションを図るための英語や中国語を学習する機会を設けた。

「持続可能な社会の探究Ⅰ」（2年次必修）において、昨年度から開講している4講座（「経済発展と環境」、「国際関係と課題解決」、「国際協力とジェンダー」及び「情報技術と創造力」）に加えて、新たに3講座（「生命・医療・衛生」、「音楽のグローバル化」及び「言語に依存しない情報発信」）を開講した。新規3講座においても、昨年度から開講している講座の指導サイクルを踏まえた上で、探究の過程や成果を生徒自ら外部に発信する機会や、大学教員や民間企業・国際機関・NGO等の職員など外部の有識者を活用した特別授業や校外学習等を年間を通じた指導の中に位置付け、生徒の課題探究を補完・促進することができた。講座ごとのテーマに沿った活動に加え、生徒がより多角的な視点を持てるよう、7講座を3領域（「生命と環境」、「経済と人権」、「文化と表現」）に分け、全体あるいは領域ごとに活動する機会を複数回設けることで内容の充実を図った。

本年度より開講した「持続可能な社会の探究Ⅱ」（3年次必修）においては、3年間の取組のまとめとして、これまでの探究の成果や各教科の学習内容、身に付けた技能や資質を生かしてクラスごとに全員で英字新聞を作成し、「全国中学校・高等学校英字新聞コンテスト」に出品した。（「外国メディア賞」を受賞）

本年度の各科目等（海外研修を含む）や課外活動においては、課題研究グループの教員を中心に、課題探究型学習の質の向上に向けた授業改善やルーブリックを用いた生徒の自己評価・相互評価、教育評価の試行などに取り組んだ。これを基に、管理機関や本校SGH運営指導委員会等からの助言も得つつ、評価項目・方法等の見直しに向けた検討を行った。

教養基礎を含む全ての科目等において、未来のグローバル・リーダーとして幅広く、豊かな教養の醸成を図るため、確かな知識・理解、論理的な思考力・論述力の強化を図るとともに、学校設定科目「グローバル地理」（1年次必修）や教養基礎科目等も活用し、2年次から本格的な課題探究に着手することとなる1年生を対象に、データの分析や文献資料、フィールドワークによる情報収集、レポート・論文の執筆のルール等について、実践を交えつつ学ぶ機会も提供した。

我が国の伝統文化についての識見を深めるため、昨年度に引き続き、国立劇場（独立行政法人日本芸術文化振興会）及び歌舞伎座（株式会社松竹）の協力を得て、校内外のレクチャーを含めた文楽及び歌舞伎の鑑賞会を実施した。

東京工業大学との高大連携教育事業として、5月にサイエンスレクチャー「魔法教室」、「一日東工大生」などの特別企画に計27名が参加したほか、8月に、2泊3日の「サマーチャレンジ」³に3年生希望者10名が参加したほか（うち3名が高大連携特別入試に合格し同大学に進学予定。）、12月には本校において同大学教員による「ウインターレクチャー」（1・2年生全員対象）を開催した。さらに本年度は、東京工業大学グローバル人材育成推進支援事業の一環である科学教育を通じた日本・タイの国際交流プログラムへ本校の教員及び生徒が協力・参加した。

³平成16年度より実施されている、東京工業大学が主催する2泊3日の合宿型教育プログラム。「未知の分野への挑戦から何かをつかみとる」をテーマに、大学教員による大学レベルの高度な講義を受講し、講義において与えられた難解な課題について、他校の生徒とも協力・議論しながら、データの分析・計算や実験・観察等を経て仮説の設定・検証を行い、自ら又はグループでの見解をまとめ、発表する機会を提供するものである。中学校・高等学校で培った理科・数学科の基本的な知識はもとより、将来の科学技術を担う人材に求められる発想力・独創性・グループワークの技能等の涵養を図ることをねらいとしており、本プログラムにおける学習活動の様子は、高大連携特別入試の選考材料の一つとなる。本年度は、平成27年8月2日から4日にかけて開催され、本校生徒のほか、東京工業大学附属科学技術高等学校より35名、東京学芸大学附属高等学校より10名、その他の高等学校等から10名の生徒が参加した。

生徒の意識・能力等に関する調査に関しては、本校の SGH の取組に対する全校生徒（平成 28 年 4 月及び平成 29 年 1 月の 2 回）及び保護者（平成 28 年 12 月～平成 29 年 1 月）の意識調査に加え、本年度は、1・2 年生全員を対象に「GPS アカデミック」（株式会社ベネッセコーポレーションが実施。以下「GPS テスト」という。）を実施し生徒の能力・適性或課題等の傾向を分析した。

ホームページやパンフレット、校内外の成果報告会などを通じた本校の取組成果の普及に力を注いだ。「全附属大会⁴」（平成 28 年 10 月）等において、SGH や SSH 等に指定されている他の国立大学附属高等学校の管理職・研究主任等との情報交換及び協議を行ったほか、「平成 28 年度第 2 回スーパーグローバルハイスクール（SGH）連絡協議会」に際し本校教諭がパネリストとして登壇し、本校生徒の様子をふまえ討論を行った。また、筑波大学附属坂戸高等学校主催「SGH 校生徒成果発表会」（11 月実施）ポスター発表へ本校の 2 年生 7 名を派遣した。3 月には、SGH 成果発表会兼公開教育研究会を平成 29 年 3 月 18 日に開催し、本校の SGH 事業の成果と課題を報告し、参加者と意見交換を行った。（第 2 回運営指導委員会と同日開催）

7 目標の進捗状況、成果、評価

（1）本年度の研究開発の進捗状況

昨年度までに整備した全教員で取組む校内実施体制のもと、指定 3 年目の本年度は、教育課程の変更を受けて、研究開発の仮説を以下のように変更した。

仮説 A 「グローバル地理」及び「持続可能な社会の探究 I・II」の実施を通じて、全校生徒が 3 年間を通じてグローバルな諸課題を学び、各自の興味に応じて探究を深めることで、グローバル人材に必要な国際的な資質や能力、持続可能な社会に寄与する意欲を持つ女性人材を育てることができる。

仮説 B 「教養教育」の充実により、グローバル女性人材育成の土台となる基礎学力や広い教養、グローバル女性人材に必要な社会の諸課題への関心、それらを解決しようとする意欲、自主性の高い生徒を育成することができる。

【構想調書において掲げた本校の研究開発の目標】

- ① 確かな基礎学力と広い教養を身に付け、グローバルな社会の諸課題に高い関心を持つ生徒を育成する。
- ② 社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、解決する能力を持つ生徒を育成する。
- ③ 言語活用能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力、ICT 活用能力の高い生徒を育成する。

上記の仮説 A、および仮説 B を今後の研究開発の仮説として検証していくこととし、上記の目標に向けて、年度当初に提出した「研究開発実施計画書」（以下「実施計画」という。）に則り研究開発を進めた。管理機関の支援や、国内の他の大学・高等学校、民間企業、国際機関、NGO、海外の大学・高等学校等からの協力も得つつ、外国人講師・留学生 TA 等による指導や支援、外部講師による特別授業、校外で行われる教育プログラムや海外研修なども年間を通じた指導計画や日々の授業計画の中に効果的に位置付け、各教員が授業実践や教育評価等を通して得た成果や課題、生徒の要望や課題意識等について教員間で共有し活発な議論を重ね、教育内容・方法や指導体制等に改善を加えながら、全校を挙げて研究開発を進めることができた。

（2）本年度の研究開発の主な成果

本年度は、必修科目を活用し、3 年間を通じた課題探究型科目等の基本的な指導サイクルを

⁴ 「全国国立大学附属学校連盟（全附属）大会高等学校部会教育研究大会」。

確立することができた。特に、2・3年次の「総合的な学習の時間」の各科目等において、生徒が自ら課題を発見・設定し、個人やグループ単位でのフィールドワークや文献調査、ディスカッション等を通じて課題の解決を図る能力を養成するための指導上の工夫を図り、昨年度の取組の反省や生徒の要望等も踏まえ、英語による課題探究の機会や、取組の過程や成果を生徒自ら外部に発信する機会を拡充することができた。

また、1年次の生徒に対しても、「グローバル地理」や教養基礎科目等において、基礎的な知識・理解の習得を図った上で、フィールドワークや文献調査、統計を用いたデータ分析の手法を学び実践する機会や、自らの調査結果や提言についてプレゼンテーションや新聞への投稿、ポスター等により対外的に発信させる機会を充実させることができた。また、次年度からの本格的な課題探究型学習に必要な基本的な知識や技術等を学ばせつつ、3学期以降は今後2年間かけて深めていくこととなる探究テーマの設定にも着手させることができた。

学年・教科を問わず「探究に必要な基本的な知識・技術を修得した上で、自ら社会課題を発見させ、他者とも協働しながら、課題の解決を図り、その過程や成果を様々な形態で対外的に発信させ、自身や他者による評価を通じて生徒自ら改善につなげる」という学習サイクルを生徒に繰り返し経験させ、その過程で、論理的思考力や外国語活用能力、プレゼンテーション能力、ICT活用能力等の養成・伸長を促すことができた。

教育評価に関しては、本年度、全ての1・2年生を対象にGPSテストを実施し、本調査における本校生徒の「批判的思考力」、「協働的思考力」、「創造的思考力」の傾向を捉え、従来から全校生徒を対象に実施しているSGHの取組に対する意識調査（以下「意識調査」または単に「調査」という。）の結果や各教員が行っている教育評価と併せて、本校生徒の能力・資質の実態や特性等についての分析も行うことができた。GPSテストについては、ある程度客観的な指標に基づき、生徒の資質・能力の傾向や課題等を概観することができるため、結果を生徒にフィードバックし、自身の強みや課題を踏まえて今後の学習を進めるよう促した。

本年度は、本校のホームページ、パンフレット、成果発表会兼公開教育研究会など様々な機会を捉えて、本校の教育・研究開発の過程や成果を校外に向けて広く周知することができた。

この他、全ての学年の生徒に対して、管理機関や校外で実施される国内外の高校生等と共に社会課題に係る探究を深める教育プログラムやコンテスト、外国語を活用したプレゼンテーションやディスカッション、英語による国際交流を図ることができるイベントや、海外留学・研修プログラムへの参加を推奨し、意欲と関心のある生徒に対し、授業以外にも課題探究型学習の機会を提供するよう配慮した。

本校の課題探究型学習を通じ、生徒の校外のプログラム等への関心・意欲も高まっており、個人やグループ単位で自発的に教科等の課題やそれ以外の課題に係る探究を深め、校外の大会等での入賞などの実績につなげている生徒も増えている（平成27年度：51名→平成28年度：116名）。

（3）目標の進捗状況、成果、評価等

本年度の研究開発の実績や生徒の意識調査・GPSテストの結果から、現在の本校生徒の能力・資質や学習意欲・態度等の面について、研究開発の目標の進捗状況等を以下のようにまとめた。

※以下、「大変」＋「やや」は「大変そう思う」、「ややそう思う」と回答した生徒割合を示す。

【目標①:「確かな基礎学力と広い教養を身に付け、グローバルな社会の諸課題に高い関心を持つ生徒」の育成について】

○確かな基礎学力と幅広い教養を身に付けることへの生徒の高い意識, 保護者の理解

・意識調査より, 目標①に関連し, SGH として指定され課題探究型の学習を充実させた後も, 本校が基本方針や教育目標として掲げる高度な「教養」や「基礎・基本を重視し, 広い視野と確かな見方・考え方」を身に付けることに対する生徒の意識の高さ, 保護者の理解が見られる。また, 汎用的能力の価値について生徒は理解している。一方で, 文理選択を行わないカリキュラムや学校設定科目については, 進路選択に結び付くと考える生徒の割合が減っている。

意識調査の第2回調査(本年1月)において, SGH を通じて身に付けたい資質や能力について, 5割を超える生徒が「幅広い教養」と回答している。特に2年生では, 「英語を活用する能力」(53%)よりも高い。課題探究を進める上での手段も大切であるが, 深い思考や探究を根底から支える豊かな知識や教養を育むことが重要であると認識している様子が見える。

しかしその一方で, 幅広い教養の有効性について, 文理選択を行わないカリキュラムや高大連携を目的として開設された学校設定科目「教養基礎」に関しては, 前年度よりも生徒の評価を下げた。(「大変」+「やや」77.6%→66.6%) 今後は, カリキュラムマネジメントの視点から, 探究活動と学校行事, 教科の学習などのバランスを考えたカリキュラムの編成・検証・改善が必要である。

教養教育の意義については, 保護者からは引き続き一定の理解を得られており, 本年度の保護者の意識調査においても, 「教育方針に即して適切な教育課程が編成されている」(「そう思う」, 「ややそう思う」)と回答した保護者の割合は82.3%, 「教育方針に則して生徒の力を伸ばす授業が行われている」(「そう思う」, 「ややそう思う」)と回答した保護者の割合は73.6%となっている。

○現代社会の諸課題及び当該課題の探究への関心・意欲の向上

・意識調査より, 目標①に関連し, 本校の課題探究型学習を通じて, グローバル社会を取り巻く諸課題に対する関心を高めることができ, さらなる学習や探究を深めたいとする生徒が多いことが読み取れる。

「総合的な学習の時間」を通して現代社会の諸課題について関心を高めることができたとする生徒は依然として8割近くいる。特に, 本年度「持続可能な社会の探究Ⅱ」(必修3年生)について, 昨年度第2回調査(昨年1月)と本年度第2回調査の結果を比較すると, 「総合的な学習の時間」を通して現代社会の諸課題について関心を高められる(「大変」+「やや」)と考える生徒の割合が84.7%から89.3%に増加している。

【目標②:「社会の諸課題を発見し, 異なる文化的背景を持つ人々と協働して, 解決する能力を持つ生徒」の育成について】

○課題を自ら発見・設定する能力の向上と高い関心

・意識調査, GPS テスト及び生徒の課題探究の様子から, 目標②に関連し, 多くの生徒が社会の諸課題を発見し, 解決する能力の有用性を認識しており, 特に, 「課題を自ら発見・設定する能力」の伸びを生徒自身が実感していること, 他の高校生のみならず大学生・社会人と比較しても, ある程度そうした能力を身に付けていることが分かる。

第2回目の意識調査では、95%を超える生徒が「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」（「大変」＋「やや」）と回答している。また、同調査における第1回調査から第2回調査の結果を比較すると、特に、「総合的な学習の時間」等において自ら課題を発見・設定する学習経験を積んだ2・3年生を中心に、学習の成果が一定程度上がっている。以下にそのいくつかをまとめた。（第1回から第2回調査の回答率の推移「だいたいできる」＋「できることもある」）

- ・まとまりのある英文を書ける3年生：46.8→65.8%
- ・必要に応じて他者と協力して活動を進められる3年生：79.8→85.4%
- ・事実の客観性を意識して確かな推論や根拠を立てることができる2年生：69.2→85.3%
- ・主張と根拠の整合性を確認できる2年生：65→75.8%

さらに、本校の1・2年生全員が受検したGPSテスト⁵の結果概要は下表のとおりである。「批判的思考力」では、大学生や社会人の平均と比較しても極めて高い値を示している。

思考力	1年生平均グレード（112名）	2年生平均グレード（116名）
批判的思考力	トータル：A（0/60） ・情報を抽出し吟味する：A ・論理的に組み立てて表現する：C	トータル：A（0/79） ・情報を抽出し吟味する：S ・論理的に組み立てて表現する：B
協働的思考力	トータル：A（9/89） ・他者との共通点・違いを理解する：A ・社会に参画し人と関わり合う：B	トータル：A（13/77） ・他者との共通点・違いを理解する：A ・社会に参画し人と関わり合う：B
創造的思考力	トータル：A（7/74） ・情報を関連付ける：A ・問題を見出し解決策を生み出す：B	トータル：A（9/68） ・情報を関連付ける：A ・問題を見出し解決策を生み出す：B

特に、2年生で高い数値を示しているのは、本年度より全員履修の「持続可能な社会の探究Ⅰ」の各講座において、目標②で掲げた「社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、解決する能力」の育成をテーマに、年間を通じた指導及び日々の授業実践を積み重ねた成果が一定程度上がっているためであると考えられる。

8 次年度以降の課題及び改善点

中間評価をふまえ、これまでの取組の成果を維持しつつさらに発展させるため、次の点に重点をおき、今後の研究開発を進めていくこととしたい。

今年度より、新たな教育課程の下で2・3年次のすべての生徒を対象とした「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」を開講し、また、校内選考を経て参加者を決定する形式で2年次の海外研修を実施した。そうした変更をふまえ、「持続可能な社会の探究Ⅰ」に関しては、新規開講講座を含むすべての講座について、今年度実施した1年間の課題探究型の指導サイクルを見直し、質的向上を図ることが課題である。海外研修に関しては、今年度構築した授業外での指導サイクルを軸として、さらにフィールドワークとしての効果的な活動となるよう、「持続可能な社会の探究Ⅰ」との連携を図ることが課題である。

評価に関しては、前述の意識調査及びGPSテストの結果を研究効果測定の指標としながら、「総合的な学習の時間」を中心に各科目等の課題探究型学習において活用し得る、自己・相互評価の方法・様式について更なる工夫をすることが課題である。また、評価の結果の活用について、生徒にどのようにフィードバックを行うか、探究活動の見直しにどのように活用できるかを検討することが課題である。

⁵ 本テストの結果は、S・A・B・C・Dの5段階評価で示される。

II 平成 28 年度 SGH 研究開発の成果と課題

【研究開発の目標】

- ① 確かな基礎学力と広い教養を身に付け、グローバルな社会の諸課題に高い関心を持つ生徒を育成する。
- ② 社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、解決する能力を持つ生徒を育成する。
- ③ 言語活用能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力、ICT 活用能力の高い生徒を育成する。

〈本年度の研究開発の主な成果〉

本年度の研究開発の実績や生徒の意識調査・GPS⁶テストの結果から、現在の本校生徒の能力・資質や学習意欲・態度等の面について上記の目標に対する進捗及び成果をまとめると次のようになる。

※以下、「大変」+「やや」は「大変そう思う」、「ややそう思う」と回答した生徒割合を示す。

【目標①:「確かな基礎学力と広い教養を身に付け、グローバルな社会の諸課題に高い関心を持つ生徒」の育成について】

○ 確かな基礎学力と幅広い教養を身に付けることに対して、生徒の意識は高く、保護者からも一定の理解が得られている。

意識調査(第2回)において、SGHを通じて身に付けたい資質や能力について、5割を超える生徒が「幅広い教養」と回答している。

教養教育の意義について保護者アンケートでは「教育方針に即して適切な教育課程が編成されている」、「教育方針に則して生徒の力を伸ばす授業が行われている」という項目について肯定群はそれぞれ82.3%、73.6%であった。

○ 現代社会の諸課題及び当該課題の探究への関心・意欲の向上が見られる。

「総合的な学習の時間」を通して現代社会の諸課題について関心を高めることができたとする生徒は依然として8割近くいる。特に、本年度「持続可能な社会の探究Ⅱ」(3年次必修)について、昨年度第2回調査(昨年1月)と本年度第2回調査の結果を比較すると、「総合的な学習の時間」を通して現代社会の諸課題について関心を高められる(「大変」+「やや」と考える生徒の割合が84.7%から89.3%に増加している。

【目標②:「社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、解決する能力を持つ生徒」の育成について】

○ 課題を自ら発見・設定する能力の向上と高い関心

第2回目の意識調査では、95%を超える生徒が「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」(「大変」+「やや」と回答している。また、同調査における第1回調査から第2回調査の結果を比較すると、特に、「総合的な学習の時間」等において自ら課題を発見・設定する学習経験を積んだ2・3年生を中心に、学習の成果が一定程度上がっている。以下にそのいくつかをまとめた。(第1回から第2回調査の回答率の推移「だいたいできる」+「できることもある」)

- ・まとまりのある英文を書ける3年生: 46.8→65.8%
- ・必要に応じて他者と協力して活動を進められる3年生: 79.8→85.4%

⁶ すべての1, 2年生を対象に実施。本テストの結果は、S・A・B・C・Dの5段階評価で示される。

- ・事実の客観性を意識して確かな推論や根拠を立てることができる2年生：69.2→85.3%
- ・主張を根拠の整合性を確認できる2年生：65→75.8%

さらに、本校の1・2年生全員が受検したGPSテストにおいて「批判的思考力」では、大学生や社会人の平均と比較しても極めて高い値を示している。

思考力	1年生平均グレード（112名）	2年生平均グレード（116名）
批判的思考力	トータル：A（0/60） ・情報を抽出し吟味する：A ・論理的に組み立てて表現する：C	トータル：A（0/79） ・情報を抽出し吟味する：S ・論理的に組み立てて表現する：B
協働的思考力	トータル：A（9/89） ・他者との共通点・違いを理解する：A ・社会に参画し人と関わり合う：B	トータル：A（13/77） ・他者との共通点・違いを理解する：A ・社会に参画し人と関わり合う：B
創造的思考力	トータル：A（7/74） ・情報を関連付ける：A ・問題を見出し解決策を生み出す：B	トータル：A（9/68） ・情報を関連付ける：A ・問題を見出し解決策を生み出す：B

特に、2年生で高い数値を示しているのは、本年度より全員履修の「持続可能な社会の探究Ⅰ」の各講座において、目標②で掲げた「社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、解決する能力」の育成をテーマに、年間を通じた指導及び日々の授業実践を積み重ねた成果が一定程度上がっているためであると考えられる。

〈次年度以降の課題及び改善点〉

中間評価をふまえ、これまでの取り組みの成果を維持しつつさらに発展させるため、次の点に重点をおき、今後の研究開発を進めていくこととしたい。

今年度より、新たな教育課程の下で2・3年次のすべての生徒を対象とした「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」を開講し、また、校内選考を経て参加者を決定する形式で2年次の海外研修を実施した。そうした変更をふまえ、「持続可能な社会の探究Ⅰ」に関しては、新規開講講座を含むすべての講座について、今年度実施した1年間の課題探究型の指導サイクルを見直し、質的向上を図ることが課題である。海外研修に関しては、今年度構築した授業外での指導サイクルを軸として、さらにフィールドワークとしての効果的な活動となるよう、「持続可能な社会の探究Ⅰ」との連携を図ることが課題である。

評価に関しては、前述の意識調査及びGPSテストの結果を研究効果測定の指標としながら、「総合的な学習の時間」を中心に各科目等の課題探究型学習において活用し得る、自己・相互評価の方法・様式について更なる工夫をすることが課題である。また、評価の結果の活用について、生徒にどのようにフィードバックを行うか、探究活動の見直しにどのように活用できるかを検討することが課題である。

Ⅲ 実施報告書

1 研究開発の概要

1.1. 研究開発の概要

グローバルな社会的課題の発見・解決を目指して探究的な学習を行う、必修の課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」、及び確かな基礎学力と広い教養の涵養を目指す「教養教育」の教育課程の研究開発を行う。

1.2. 本年度の研究開発の経緯

昨年度までに整備した全教員で取組む校内実施体制のもと、指定3年目の本年度は、教育課程の変更を受けて、研究開発の仮説を以下のように変更した。

仮説 A 「グローバル地理」及び「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」の実施を通じて、全校生徒が3年間を通じてグローバルな諸課題を学び、各自の興味に応じて探究を深めることで、グローバル人材に必要な国際的な資質や能力、持続可能な社会に寄与する意欲を持つ女性人材を育てることができる。

仮説 B 「教養教育」の充実により、グローバル女性人材育成の土台となる基礎学力や広い教養、グローバル女性人材に必要な社会の諸課題への関心、それらを解決しようとする意欲、自主性の高い生徒を育成することができる。

上記の仮説 A、及び仮説 B を今後の研究開発の仮説として検証していくこととした。

校内の実施体制については、昨年度は、研究部が事業全体の調整を担い、課題研究グループ、教養教育グループ及び連携・評価・発信グループに全ての教員を配置する形に改編した。さらに今年度は、ほとんどの教員が課題研究に関わる体制となったため、研究部と各課題研究担当が集まって協議する「拡大研究部会」を設置した。

さらに、昨年度に引き続き、管理機関であるお茶の水女子大学による支援体制の強化、高大連携特別教育プログラムの充実を図った。お茶の水女子大学教授陣「アドバイザーボード」も活用し、専門的な見地から研究開発及び事業運営に係る協力・助言を得た。

教育課程については、昨年度、「総合的な学習の時間」の2年次選択必修「グローバル総合」、3年次選択「グローバル総合アドバンス」を廃止することを決定し、今年度より必修科目「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」にそれぞれ統合して研究開発及び試行を行った。特に「持続可能な社会の探究Ⅰ」においては、より広く生徒の探究テーマをカバーするため3つの「領域」（生命と環境、経済と人権、文化と表現）を設け、昨年度「グローバル総合」において開講していた4講座（「経済発展と環境」、「国際関係と課題解決」、「国際協力とジェンダー」、「情報技術と創造力」）に加え、新たに3講座（「生命・医療・衛生」、「音楽のグローバル化」、「言語に依存しない情報発信」）を開講し、各領域には2～3の講座が属するようにした。講座内での活動だけでなく、領域単位で活動をする機会を設けることにより、生徒がより多面的な視点から探究活動を行えるようにした。

海外研修については、2年次の課題研究の1本化に伴い、参加者の募集・選考について、2年生全員から募る形に変更し、意欲と能力のある生徒がテーマに依らず参加できる形に変更し実施した。海外の学校との連携については、一昨年度より実施してきた台湾研修及び同研修における台北市立第一女子高級中学（以下「台北一女」という。）との交流と、英語によるディスカッション、

台湾大学等の大学生との英語によるディスカッションを含む交流を実施した。タイ研修は実施しなかったものの、一昨年度から交流を進めてきたチュラーロンコーン大学附属中等学校とは、8月のイオン・アジアユースリーダーズ(於バンコク)に参加した生徒たちがプログラム実施前に ICT を活用して研究テーマに関する意見交換を行った。

この他、官公庁や国内外の大学等が主催する海外留学・研修プログラムへの生徒の積極的な参加を促した。過去にプログラムに参加した生徒が下級学年の生徒に対して参加動機や海外での学習・体験、プログラムへの参加を通して学んだことなどについて報告する機会を設け、プログラムへの関心を高めるとともに、プログラムへの応募・参加に向けて、学年・学級の担任教諭や英語科教諭を中心に個別に相談に応じ、指導・助言を行うなど、きめ細かな対応に努めた。本年度は、SGH 指定校及びアソシエイト校の生徒を対象とした筑波大学とカナダのブリティッシュコロンビア大学(UBC) 共同の「筑波・UBC グローバルリーダーズプログラム 2017」に1名が応募したほか、「平成 29 年度後期(第期)官民協同海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」に2名、Tazaki 財団留学プログラムに2名、UWC(United World Collages)に2名が応募しており、現在、それぞれ1名ずつ1次選考を通過し2次選考に向けて準備を行っている。

2 課題研究グループの取組

2.1. 1 年次必修「グローバル地理」（地理歴史科 学校設定科目）

(1) ねらい

本科目は、現代世界の諸課題について教科書等により基礎的な知識の習得を図った上で、通常授業のほか、フィールドワークや大学・企業等から招聘した講師による特別授業、課外活動なども通じて、課題に対する考察を行い、その成果を個人又はグループでレポートや記事等にまとめ、外部に向けて発信するという学習サイクルを螺旋階段状に繰り返し、幅広い教養を備えたグローバル人材としての土台を築くとともに、2年次以降の本格的な課題探究の基礎を養成することをねらいとしている。

(2) 内容

年間の主な流れは次の図の通りである。



図 2.1-1 グローバル地理 年間の流れ

①通常授業

「地理 A」の教科書等をテキストとして用いながら、地図の活用、身近な地域と世界の結びつき、世界の生活・文化、環境、資源・エネルギー、自然災害と防災、人口・食料、ジェンダーなどの社会的課題に関する分野・領域を広く学習し、基礎学力の形成に努めた。

夏季休業には、1 学期の学習内容を踏まえた探究活動として、環境小論文もしくは主題図を作成する課題に取り組んだ。課題に取り組むに当たっては、お茶の水女子大学附属図書館作成の「大学図書館活用術」(図 2.1-2)を用いながら、正しい一次情報を取得することの大切さを伝えるとともに、引用方法などレポート・論文の執筆ルールを指導した。また、昨年度の優秀論文を読み、優れている点や改善すべき点を分析する作業をグループで行い、結果を共有した。中央大学第 16 回高校生地球環境論文賞では本校が学校賞を受賞し、1 年生 1 名が佳作を受賞、4 名が入賞した。また第 26 回環境地図作品展においても、3 名が入賞した。

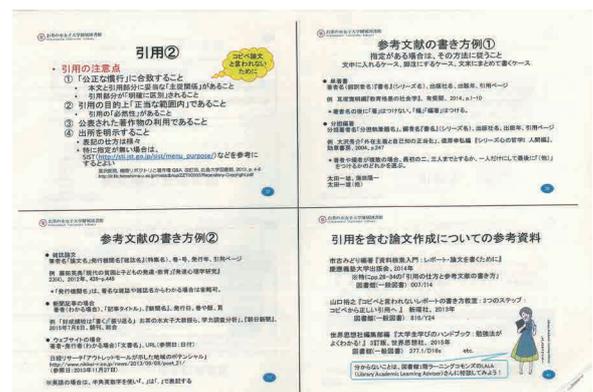


図 2.1-2 「大学図書館活用術」より

冬季休業は、興味関心のある社会的課題に対する自分の意見を新聞投稿という形で発信することを課した。

②フィールドワークの実施

昨年度に続き、5月に諏訪地方(長野県)における2泊3日のフィールドワークを実施した。従来の新入生の親睦を目的として実施していた学年合宿の目的・内容等を見直したものであり、フィールドワークの実施に当たっては、同地方でのフィールドワーク経験が豊富なお茶の水女子大学文教育学部地理学コースより引き続き助言を得つつ、担当教員が具体的な訪問先や行程等を決定した。また、事前指導として、同コース長谷川直子准教授によるフィールドワークの手法やマナー等に関する特別授業も行った。フィールドワーク後は、自らの活動報告を地元新聞に投稿するよう生徒に求めた。

③特別講義

お茶の水女子大学文教育学部地理学コース等、大学や国際 NGO と連携した特別講義を年3回実施し、学習を深めた。第1回は、お茶の水女子大学文教育学部地理学コース長谷川直子准教授による講義「諏訪の自然と地形～地形図を活用して～」を実施し、フィールドワークの手法を学んだ(5月)。第2回は、東京大学社会科学研究所の宇野重規教授による講義「被災地で考える希望の再生」を実施し、自然災害と防災の授業へとつなげた(12月)。第3回は、公益財団法人ジョイセフによる講義「発展途上国の人口問題とジェンダー」を実施し、ジェンダー問題について理解を深めた。

④⑤希望者による学会発表や防災フィールドワークの実施

本科目で学習したことを生かし、生徒が自主的に自らの意見やこれまでの学習成果を発表する場を提供するため、日本地理学会高校生ポスターセッションの部への参加を呼びかけた。秋季学術大会(平成28年9月開催)では1件(1名)、春季学術大会(平成29年3月開催)では5件(14名)が採択され学会発表を行った。

また、本校のアフガン・ボランティア部と連携した課外活動として、東日本大震災や防災について考える勉強会を開催し、文化祭やお茶の水女子大学附属中学校で成果等を報告するとともに、被災地の現状や防災の大切さについて周知した。12月には、お茶の水女子大学文教育学部地理学コースと連携して、神奈川県箱根町を訪問し、火山災害に関する防災フィールドワークを実施した。

(3) 実施効果

昨年度に引き続き2泊3日のフィールドワークを実施することにより、入学直後の早い段階で「実際に現地を見て、直接話を聞いてこそ得られる情報がある」(生徒の感想より)ということを実感できたことは、今後の本格的な探究活動に向けた一歩として大きな意義があると考えられる。フィールドワークの円滑な実施に当たっては、本科目の担当教員だけでなく、1年学年担任をはじめとする多くの教員の協力・支援により成り立つ部分が多い。2回の実施により構築できた指導体制を次年度以降に引き継ぎ、更なる内容の充実に努めたい。

学習成果をレポートや記事等にまとめ、外部に向けて発信するという作業を行うに当たっては、正しい一次情報を取得することの大切さや著作権の扱い等の執筆ルールを習得させることに力を注いだ。全員に徹底することは容易ではないが、中央大学主催の高校生地球環境論文賞で2年連続学校賞を受賞したことはその実施効果の表れであると考えられる。2年次以降の本格的な探究活動の基礎になることでもあることから、引き続き指導に努めたい。

2.2. 2年次必修「持続可能な社会の探究Ⅰ」（総合的な学習の時間）

今年度は、「持続可能な社会の探究Ⅰ」(必修2単位)において、「生命と環境」領域(経済発展と環境, 生命・医療・衛生), 「経済と人権」領域(国際協力とジェンダー, 国際関係と課題解決), 「文化と表現」領域(情報技術と創造力, 音楽のグローバル化, 言語に依存しない情報発信)の3領域7講座を開講し, 探究的な学習活動を実施した。これは, 生徒の関心・目的意識等を踏まえ, 昨年度の「持続可能な社会の探究Ⅰ」(必修1単位), 「グローバル総合」(選択必修1単位)において設定していた探究テーマや講座の追加を行ったことに伴う変更である。

昨年度, 生徒は2種類の授業で探究テーマをそれぞれ設定し, 探究的な学習を行っていたため, 負担の大きさが問題となった。また, 選択必修「グローバル総合」については, 履修を希望する生徒であっても, 開設講座数や各講座の定員の関係等で履修できないケースが少なからず生じていた。今年度は「持続可能な社会の探究Ⅰ」にまとめることで, 生徒の探究的な学習にかかる負担を解消し, 探究活動の質的向上を図った。さらに, 昨年度までの「グローバル総合」での開設講座に加え, 新規3講座を含む7講座を開設することで, すべての生徒が興味・関心に基づいて講座に配属されるよう改善した。

今年度の活動は, 4月から6月頃までを「探究活動準備期」, 7月頃から12月頃までを「探究活動集中期」, 1月頃から3月までを「探究活動集約期」として3期に分けて行った。

「探究活動準備期」において, 今年度は新規講座が複数あることを踏まえて, 初回の授業を全体で行い, 5月に実施するフィールドワークの説明などを行った。また, フィールドワークも5月20日に全講座一斉に実施した。「準備期」のまとめの活動として, 各領域で日程を定め報告会を実施した。生徒たちは, この報告会が他者(他講座)への初めての発信活動の場になり, 自己評価や相互評価を行うことで, 次の活動に向けて様々な課題を把握することができた。

「探究活動集中期」は, より探究的な学習を行うことができるよう, 各講座の取り組みに集中する時期として設定した。期間中には各領域で中間報告会を行い, 意見交換を行うことでより多角的に探究活動を進められるよう促した。報告会の形態はオーラルプレゼンテーションやポスタープレゼンテーションなど, 領域の特性に応じた形で実施し, 相互評価及び意見交換を行った。

「探究活動集約期」は, それまで行ってきた学習活動を論文等の成果物にまとめる期間として設定した。3月の成果発表会で行われる午前の発表は1・2年生全員で代表生徒発表を聞き, 午後は次年度講座に配属される1年生に対して, 探究活動の紹介や取り組みについて発表及び意見交換を講座ごとに行うことを予定している。

以上のように, 講座ごとの活動を基本とする中に, 「領域」活動や「全体」活動を一部取り入れ, 各講座での活動がより多角的なものになるよう工夫した。次年度は, 報告会等の時期の設定の見直しを行い, より良い取り組みができるよう検討したい。各講座の活動内容は, 2.2.1.～2.2.3.を参照されたい。

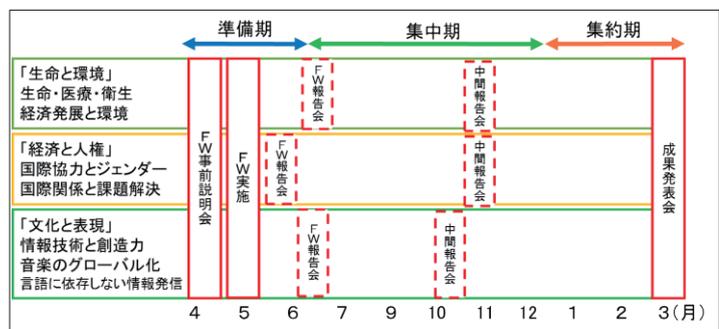


図 2.2-1. 全体・領域スケジュールの概要

2.2.1. 「生命と環境」領域

2.2.1.A. 経済発展と環境

(1) ねらい

本講座は、環境問題の現状を理解し、解決方法を探るための議論・探究を行うことで、主体的に課題を発見し解決する力やコミュニケーション能力を養うことを目指すとともに、環境問題を解決するための具体的な方策を検討したり、他者の異なる意見をまとめたりする経験を通して、公共性や倫理観、リーダーシップを備えた未来のグローバル・リーダーの育成を目指すことをねらいとしている。

(2) 内容

4月には受講者21名が自ら設定した環境問題に関する様々な探究テーマを持ち寄り、それを共有することで講座がスタートした。

①外部講師の活用や外国人留学生の招聘

4月～6月は、課題探究を進める上で必要となる基礎的知識や論理的な思考力の基盤形成を促す時期と位置づけ、1年次に必修「グローバル地理」において学習した参考文献の探し方、レポートや論文執筆のためのルール等を確認するとともに、文献やインターネットでは得られない情報入手を目的に、生徒自身が自ら訪問先を設定し、アポイントを取り、聞き取り調査を実施した。また、全員で東京農工大学工学部銭研究室及び東京大学社会科学研究所を訪問した他、民間企業等の外部講師を招聘した授業を実施した。

さらに、お茶の水女子大学博士課程の外国人留学生TA(中国・ハンガリー・ロシア)を招聘し、出身国の環境問題の現状及びその解決策について英語でディスカッションを行う機会を設けた。1年次の「グローバル地理」で学習した中国の環境問題についての理解を深めるとともに、生徒たちにとって普段あまり馴染みのないハンガリーやロシアの環境問題についての識見を得る機会とすることができた。また、生徒は英語で自らの意見を述べたり、他者の意見や他国の事情について質疑応答を行ったりしながら議論をまとめていく経験をする事により、外国語で探究する能力の不足を自覚し、今後の英語学習の動機付けとすることもできた。



図 2.2.1.A-1 東京農工大学工学部訪問の様子



図 2.2.1.A-2 東京大学社会科学研究所訪問の様子

②各種大会等を活用した、他者と協働して行う課題探究の推進

7月からは、研究テーマが類似する生徒同士を5グループに分け、グループごとに課題研究テーマを1つ設定させ、グループ単位での課題探究に取り組ませた。5グループの探究テ

テーマは以下の通りである。

グループ	テーマ	生徒数
A	未来改造計画ーエネルギーの地産地消を考えるー	4
B	食品ロス問題の解決に向けて	4
C	What Makes You Happy? ー幸せな環境とはー	5
D	東京オリンピックに向けた地震対策のあり方について	4
E	服と環境問題ー“服”で地球に幸“福”をー	4

また、2 学期以降は、グループ別に課題探究を深めつつ、その内容をもとに、「第 19 回全国中学高校 Web コンテスト」(特定非営利活動法人学校インターネット教育推進協会主催)、「第 2 回全国ユース環境活動発表大会」(独立行政法人環境再生保全機構、環境省及び国連大学サステナビリティ高等研究所による共催)といった大会等への作品の応募や出場を課した。これらの取組を通して、生徒に、期限を意識しながらグループ内で作業の分担・進捗管理を行い、異なる意見・価値観を持つ他者と議論や調査等を重ね、プレゼンテーションの内容や成果物(日本語と英語で作成)をまとめ上げていく学習経験を積ませることにより、他者と協働してより質の高い課題探究を目指すよう促した。また、他校の生徒の取組を直接見聞き議論する機会を提供することにより、生徒が自らのプレゼンテーション能力や論理的な思考力・論述力等における課題を発見し、探究活動の改善やさらなる質の向上を図るよう動機付けを行った。「第 19 回全国中学高校 Web コンテスト」では 3 グループが最終予選を通過しファイナリストに選ばれ、いずれも金賞を受賞した。「第 2 回全国ユース環境活動発表大会」では 1 グループが全国大会に出場し優秀賞を受賞した。

3 学期には、1 年間の課題探究の成果として、生徒に対して、グループ単位での論文の執筆を課し、生徒間での論文の相互評価を実施した。

(3) 実施効果

1 月に実施した SGH 意識調査の結果をもとにした本講座の効果検証のうち、特記すべき点は以下の通りである。

「総合的な学習の時間を通し、現代社会の諸課題に関心を高められる」(2(1))という項目に対して、「①大変そう思う」と回答した生徒は 55.6%と他講座比で最も高く、学年平均の 26.4%を大きく上回る。「②ややそう思う」と回答した生徒と合わせると、全員(100%)が、総合的な学習の時間を通じ、現代社会の諸課題に対する関心を高める効果を感じている。

また、「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」(3(3))という項目に対しても 83.3%の生徒が「①大変そう思う」と回答、学年平均の 58.9%を大きく上回っており、これまでの探究活動の効果を前向きに捉えている生徒が極めて多いことがわかる。

さらに、「可能であれば、大学生の時に留学したい」(1(9))という項目に対しては、「①大変そう思う」の回答は 64.7%と学年平均の 35.2%を大きく上回り、前年度受講者の同時期の回答 47.1%と比較しても高い結果となっている。今年度は講座全員が海外研修に参加しているわけではないが、英語で留学生とディスカッションをしたり、探究活動の成果物を英語で作成したりする活動を通じて、今後のグローバルな活動に対する関心・意欲も高まったと考えられる。

2.2.1.B. 生命・医療・衛生

(1) ねらい

本講座では生命・医療・衛生をテーマに、グローバルな諸課題について探究活動を行う。そのために、生徒が各自設定したテーマだけでなく、幅広く生命倫理・保健医療・公衆衛生に関する基礎知識や見聞を広め、多角的な視点で探究活動を実践できるよう支援する。また発表・ディスカッション等の言語活動を通して、話す力、聞く力、伝える力の育成を図るとともに、論文・成果物等の言語活動を通じ、表現力を養う。さらに、自己や他者の取り組みを客観的に見つけ、互いに評価する活動を通じて、助言や指摘しあえる能力を養うことをねらいとする。

(2) 内容

生徒が設定した個々のテーマを、類似したテーマ、関連性のあるテーマでグルーピングし、グループ単位での調査研究、ディスカッション等の活動を行った。グループは寿命、食事、病気、生命倫理、衛生の5つの編成となり、1グループ3～6名の構成となった。

1 学期は外部講師による講義と、それを受けてグループでのディスカッションや振り返りを行った。4月にはお茶の水女子大学の飯田薫子准教授による「生活習慣病」、6月には同大学の沼部博直教授による「遺伝カウンセリング」の講義を実施し、基礎的な知識から最近の研究まで学びを深めた。また、同じく6月にJICA国際協力員の萩原明子氏による、パレスチナ、シリア、アフリカを中心とした「母子保健・母子栄養改善の協力」の講義を実施した。

フィールドワーク及び校外学習では、まず5月に国立国際医療研究センターを訪問した。事前に生徒の探究テーマや質問を伝え、生徒の探究活動に沿った講義を受けた。看護部門、感染症部門、産婦人科で働くスタッフや医師・看護師からの講義に加え、病棟内(診察室、分娩室)の見学も行った。7月には希望者を対象に東京大学医科学研究所及び隣接する近代医科学資料館を訪問し、東京大学の内丸薫教授によるHTLV-1(ヒトT細胞白血病ウイルスI型)の感染によって起こるATL(成人T細胞白血病)の研究についての講義に加え、研究室や資料館の見学を行った。

こうした活動を通じて、自分の探究テーマとは直接関連がないような内容の講義やフィールドワークにおいても、グローバルな諸課題はどこかで互いにつながりあっていることを理解することで、ひとつの課題を多角的に捉えることの重要性を理解する機会となった。

2 学期に入り、1 学期の学習をふまえて探究テーマの具体化や修正を行い、テーマに関連した情報収集や調査(フィールドワーク、インターネット、書籍、新聞、アンケート等)を実施した。またそこから得られた情報や知識をまとめ、課題解決のためにどのようにアプローチするのか、考察を深めた。

冬休みには「プレ論文」の作成を通じて、これまでの探究成果を一度まとめて客観的に見直し、今後の探究活動の方向性や効果的なまとめ方を試行錯誤する機会とした。また、この「プレ論文」以外にも、探究成果や活動の進捗状況を振り返る場として、6月と11月に中間報告会を設定した。この報告会は同領域の「経済発展と環境」講座と合同で行い、6月は5月に行ったフィールドワークの報告、11月はそれまでの探究活動の中間報告を目的とした。中間報告会では、全員が発表者としてプレゼンテーションを、また聞き手として助言や評価といった活動を実践した。

3 学期には年間の探究活動の総まとめとして、冬休みの「プレ論文」を基に各自が論文を執筆したほか、成果物の作成・制作に取り組み、それらを互いに発表した。発表会では相互の探究活

動についての成果や内容に対する評価もあわせて実施し、情報を共有した。

(3) 実施効果

本講座は今年度新規開講講座であったが、本校生徒の医療・衛生分野への興味関心は高く、当初は受講希望者が定員の3倍に達した。本講座では、外部講師による専門分野に特化した話も、基本的には全員で聞き、学んだことをグループごとにディスカッションして講座全体で共有することを重視し、意識的に時間を割くことで、生命・医療・衛生に関するグローバルな諸課題は相互に関連しており、その解決方法をひとつの側面からのみ探るだけでは根本的な解決には結びつかないということを強調した。年度当初は単に、自分の探究テーマに関連する知識のみを深く掘り下げようとする姿勢が見られたが、次第に探究テーマとは直接関連しない専門的な講義でも積極的に質問をし、ディスカッションを行う姿勢が目立つようになり、助言や指摘しあえる能力の向上が見られた。

また本講座のもうひとつのねらいである、言語活動を通じた表現力の向上のために、領域活動のひとつである中間報告会においては全員が話し手・聞き手両方を務める機会を十分に確保した。「〇分で」「スライド 1 枚で」「資料なしで」など定められたルールの中で、フィールドワーク報告や探究の成果を効果的に相手に伝えるための試行錯誤を通じて、本講座のねらいが達成された。

一方、次年度に向けた課題として、個々の探究テーマに関する活動時間の確保が挙げられる。1 学期を中心に、生命・医療・衛生に関する様々なグローバルな課題の解決に取り組む専門の方々から学ぶ機会が多くある一方、個々のテーマに特化した活動を本格的に始めた時期はやや後ろ倒しになった。また、本講座のねらいと年間スケジュールを理解し、年度前半で幅広い視点と知識を蓄え、グローバルな諸課題に対して自分なりに思考を深めてきた生徒は、自ずと個々の活動始動時に何をすべきかをきちんと見極めスムーズに探究活動へ移行できていたが、受動的に知識のみを取り込んできた生徒は、いざ自分の探究テーマに関する活動を開始しようとしても、最初の一步をなかなか踏み出せずにいる様子も見受けられた。以上の点は、改善に向けた検討の必要があると思われる。



図 2.2.1.B-1 外部講師による特別講義



図 2.2.1.B-2 フィールドワークの様子



図 2.2.1.B-3 フィールドワークの様子 2



図 2.2.1.B-4 中間報告会の様子

2.2.2. 「経済と人権」領域

2.2.2.A. 国際協力とジェンダー

(1) ねらい

ジェンダーの視点を踏まえて、グローバルに諸課題を捉え発信し得る力を持つ女性リーダー育成を目指す。具体的には、教育課程の確立、世界各地で抱える貧困や紛争、女性の地位の低さの問題について現状を理解する。一方、女性の立場に配慮した援助や開発による、新たな問題解決方法について、世界各地の女性・男性のあり方や諸課題の背景を探る。課題の解決・解消に向けて自分たちにどのような協力ができるか、海外の高校生との連携や共同研究も視野に入れ、幅広い角度から考え、手法を探る。さらに、グローバルな課題を考えるとともに、自己のあり方、生き方、進路といったキャリアデザインも合わせて考えつつ、自ら探究した過程や成果について対外的に発信していく力を養う。

(2) 内容

今年度は、ディスカッションを充実させること、自分たちの活動を発信することを目標に設定した。具体的な内容を以下に示す。

① 探究活動(5月～9月)

前半は、お茶の水女子大学教授による講義やグループワークを中心に活動した。社会が抱える諸課題についてジェンダーの視点から分析・検討を行った。戸谷陽子先生による講義「アートに表象されるジェンダー」を受け、アートの世界を題材に表象リテラシーを学んだ。三浦徹先生による講義「『やさしい』イスラーム世界」では中東諸国の現状及び宗教と国際協力のあり方を学び、その課題について考えた。それぞれの講義の後には、感想・意見交換を行い、さらに考えを深めた。また、ゴールドデンウィーク期間に Facebook COO シェリル・サンドバーグのジェンダーに関する著書「リーン・イン」の読書を課し、その後に読書会を実施した。さらにプラン・ジャパンの事務局を訪問し、世界各地における貧困や紛争に苦しむ人々の状況を知り、その課題と解決策について、ジェンダーの視点から考える活動を行った。また、国際協力のキーワードである MDGs と SDGs の概略を学んだ。夏季休業中の課題として、探究レポート(本講座でこれまで学習した内容を踏まえて、ジェンダーや国際協力に関わる社会的課題を自分で設定し、調査内容や考察をレポートにまとめること)のほか、国連東京本部主催の高校生スピーチコンテストへの応募を課した。以下がその概要である。

第 63 回 国際理解・国際協力のための 高校生の主張コンクール東京都大会 9 月 19 日(月)13:00～17:00 於 JICA 地球ひろば	4 名選出うち 3 名参加 演題:「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」 が採択されたが、今後、日本と国際社会はどのよう にしてアジェンダの実施に取り組むべきか。 結果:1 名特賞(東京代表), 2 名努力賞
全国大会 10 月 24 日(月)10:30～17:00 於国連大学エリザベスローズホール	東京都代表として参加 SDGs を踏まえて論じた。 結果:全国人権擁護委員連合会会長賞受賞

② 課題解決と発信(10月～3月)

前半の活動を通して見えてきた課題の解決に向けて、自分たちには何ができるのかを中心にディスカッションを行った。また、企業や関連 NGO との共同で支援活動を実施した。具体的には、ジェンダー問題への関心を高めることを目的とした発信を行うための SNS の活用やポスターの製作、啓発グッズの開発と販売などの活動を行った。

活動はグループ単位で実施した。各グループの主な活動内容について、以下にまとめて示す。

班	設定課題と主な活動内容
Google 班 (4人)	課題:Doodle を利用したジェンダーの啓発活動について Google HP にある Doodle のデザイン募集を附属中学校、高校の生徒へ実施。募集の際に、ジェンダー問題に関するリーフレットを作成、配布。
アイデア班 (4人)	課題:Education First ～Research →(to) Action～ 都内にある大使館(イエメン共和国大使館・ノルウェー王国大使館・モザンビーク共和国大使館)を訪問し、インタビューを行い、各国のジェンダー問題に関する対策について比較検討を実施。途上国に暮らす母親たち向けに女子教育の重要性を訴える絵本を現地語(クメール語)で作成・送付。全校生徒に呼びかけ筆記用具を集め、カンボジアへ送付。世界子どもの日チャリティーウォーク&ラン(マラソン大会)への参加。
ポスター班 (2人)	課題:女の子が抱える問題—日本が支援すべき理由— ジェンダー問題啓発ポスターを作成、配布。 どら焼き販売の際に配布したジェンダー問題啓発のためのチラシを作成。
SNS 班 (5人)	課題:SNS でジェンダー問題解決へ 主に LGBT への理解と社会的問題について、SNS を使用した啓発活動の可能性について探究。 各グループの活動報告やジェンダー問題のニュースなどを発信。
商品開発班 (5人)	課題:どら焼きで世界を救おう オリジナルデザインを焼き付けたどら焼きを販売し、売り上げの一部を女子教育の支援団体に寄付。
その他 (4人)	他校や海外からの学生を交えた発表会で、英語でポスターセッションや交流を実施。

(3) 実施効果

グループによる探究活動を行い、課題解決に向けて発信する活動を通し、ジェンダーに関わる課題の現状や、女性の立場に配慮した援助や開発による、新たな問題解決方法について理解を深めた。また、外部機関との交渉、英語でのコミュニケーションを通して、より実践的なコミュニケーション能力を向上させることができた。

次年度の課題として、自発的でより積極的な探究への取り組みを促すための ICT や外部連携を活用したより効果的な教材の提示方法、評価方法等を検討していきたい。

2.2.2.B. 国際関係と課題解決

(1) ねらい

本講座は、貧困や平和、人権に係るグローバル社会における諸課題が発生する背景・要因について考察し、その解決のための具体的方策について探究する活動を通じて、グローバルな視野と課題解決力を有する人材の育成を目指すことをねらいとしている。

(2) 内容

本年度は、担当教員が、「情報化が進む世界においてサイバー問題にどう対応すべきか」、「現在世界が直面する、もしくは今後直面すると想定される社会課題を解決するために、どのように企業に投資すべきか」という2つの探究テーマを予め設定した上で、4・5月は、課題探究を進める上で必要となる基礎的な能力を形成する期間と位置付け、授業において、探究基礎力をテーマとした演習を実施した。課題探究を進める上で必要となる基礎的な探究力の養成を図った上で、6月に日本アイ・ビー・エム株式会社の職員を招聘し、グローバルリーダーシップや国際交渉をテーマとする特別授業を実施した。複雑な国際関係の中でグローバルな社会課題の解決を目指す仕事に従事する有識者の知識・経験を生かし、生徒の知識・理解の補完、探究テーマや講師の研究・仕事の内容等に対する関心の醸成や深い考察を促した。また、本講座を履修する生徒の中には、将来国際的な仕事に就きたいと考えている者もあり、特別授業を通じて、生徒たちの進路選択やキャリア形成に当たって具体的なロールモデルの一端を提示することができたと考ええる。また、途上国での市場調査を請け負う企業でインターンを行っている立教大学の学生を招き、途上国ビジネスで重要な市場調査の方法や交渉の仕方等を演習形式で学んだ。社会人講師よりも生徒と年齢が近いこともあり、より身近にグローバルリーダーシップの必要性や国際交渉力の必要性を感じることができたと考ええる。

さらに、2学期は、社会の第一線で活躍する民間企業の職員等による「社会、人、暮らしを支える仕事の力」をテーマとするリレー講義を踏まえ、「未来を支える私の力」をテーマにレポートを作成する「第16回日経エデュケーションチャレンジ」(日本経済新聞社主催)、「国際安全保障の文脈における情報及び電子通信分野の進歩」をテーマにポジションペーパーや勉強会等で得た知識を基に各国代表の立場で議論を行う「第10回全日本高校模擬国連大会」(グローバル・クラスルーム日本委員会及び公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターによる共催)、経済や株式投資についての基礎的な知識を学習した上で、チームで議論して投資テーマを決定し、ポートフォリオを作成する「第17回日経 STOCK リーグ」(日本経済新聞社主催)への参加を生徒に課し、互いに協力して課題に対する考察・探究を進め、課題を解決するための方策など、自分たちの探究の成果を他校の生徒や民間企業、国際機関等に対して発表・提言する機会を設けた。これらの大会等への参加を通じて、生徒に、期限を意識しながらグループ内で作業の分担・進捗管理を行わせ、異なる意見・価値観を持つ他者と議論や調査等を重ねながらプレゼンテーションの内容や成果物をまとめ上げていく学習経験を積ませることにより、他者と協働してより高度な課題探究を目指すよう促した。また、他校の生徒の取組を直接見聞き議論する機会を提供することにより、生徒が自らのプレゼンテーション能力や論理的な思考力・論述力等における課題を発見し、探究活動の改善やさらなる質の向上を図るよう動機付けを行った。

(3) 実施効果

本講座の効果測定として、講座内で、満足度調査と効果調査の2種類のアンケート調査を実施した。満足度調査では講座を受講しての満足度を5段階に分けたアンケート形式、効果調査は本講座を振り返ったとき、それぞれのパートがどの程度その後の探究活動に役立ったかを4段階に分けたアンケート形式で実施した。さらに、次年度以降の内容をより効果的に修正することを目的として、効果調査の中に、自身の探究力がどのように変化したかを6つの観点から自己分析し5段階で評価する項目を設けた。

満足度調査では、「非常に満足した」が19.0%、「満足した」が52.4%という結果であった。また、効果調査でも概ね同様の結果となっており、講座内容に関しては十分な成果があったといえる。自身の探究力の変化(自己評価)を表したものが以下の図である。6つの観点のうち、課題発見・解決力と論理的な思考力において、9割以上の生徒が自身の成長を感じ取っている点は本講座の大きな成果といえる。一方で、課題発見・解決力、言語活用能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力において、受講後も1(全くない)・2(あまりない)の生徒が1~3名いる。今年度から第2学年全員が探究活動をするようになったため、意欲も含め探究力の個人差が昨年度より大きい。今回の結果はそうした点が反映されたと考えられるため、次年度に向け更なる内容の質的向上をはかっていきたい。

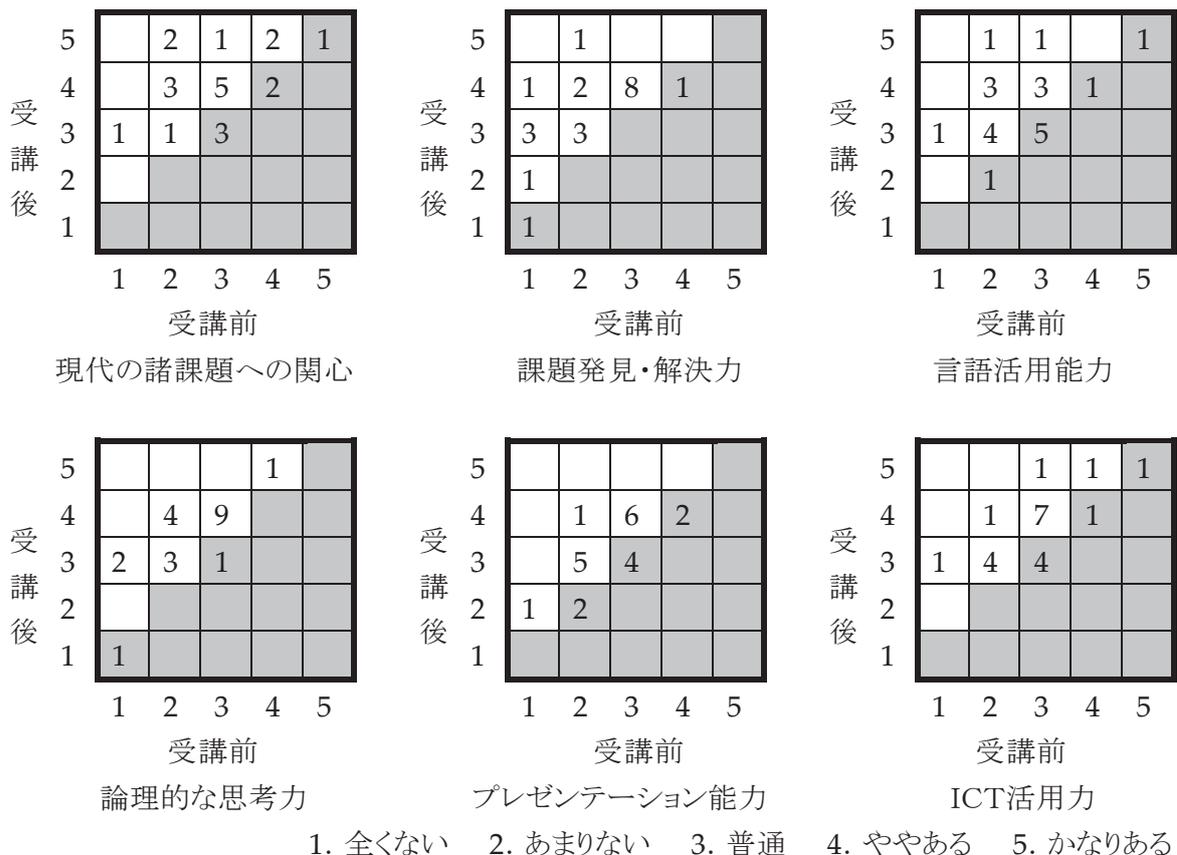


図 2.2.2.B-1 自身の探究力の変化

2.2.3. 「文化と表現」領域

2.2.3.A. 情報技術と創造力

(1) ねらい

本講座のねらいは 3 つある。1 つめは、プログラミングをはじめとした情報関連技術に関する知識と技能の修得である。情報化社会を支えている技術を知り、それらの創出に役立っているプログラミング等の技能を身に付けることは、未来の作り手たる者には欠かすことができない。2 つめは、ブレインストーミングなど思考に関する手法の修練である。いかによりアイデアを考えるかは古今東西の先人たちが直面してきた課題であり、過去にも様々な手法やフレームワークが提案されてきた。それらを知り、やってみて、知的技法のレパートリーを増やすことは有益である。3 つめは、自身の言動・態度に対する自己認識と必要に応じた改善行動の実行である。生徒自身が、自分自身の言動・態度に注意を払い、自分自身の言動・態度が想定する人物像にふさわしいか考え、もしふさわしくないならば言動・態度をどのように変えてゆけばよいかをしばし立ち止まって考えられることは、リーダーシップを醸成するうえで重要である。

以上の 3 つのねらいのもと本講座で以下の内容を実施した。

(2) 内容

本講座は、「情報技術」と「創造力」という 2 つの要素から成り立っている。情報技術とは、いわゆる IT/ICT に関わる言葉である。創造力は、いわゆるイノベーションやアイディエーションに関わる言葉である。

情報技術について、まず Visual Programming 言語を利用する Scratch, Artec Robotist でプログラミングを導入した。続けて、プログラミング学習用にシンプルな構文でプログラムを書ける Ruby を紹介し Google Blockly, Hour of Code, Progate といったオンライン学習サービスを紹介した。その後は、各自の技能と課題解決に応じたソフトウェア (Xcode, Visual Studio, Text Editor, Processing など) に移行していった。夏季休業期間には TECH for TEACHERS その他を利用して、少数の希望者を対象にした短期間のスキルアップ講習を実施した。

創造力について、スキル、マインド、教養(柔軟な視点)を身に付けることを重視した。スキルとしては、ブレインストーミングや KJ 法などオーソドックスなものを扱った。マインドとしては、フィールドワークに臨む心構えやリーダーシップなどを扱った。教養としては、構造主義、自文化中心主義といったものを扱った。

これらの要素をより充実したものにするため、本年度は渡辺弘之氏(日本マイクロソフト)、赤羽進亮氏・有松和之氏(Sony)、粕谷昌宏氏(メルティン MMI)、前川昇平氏(リバナス)、安積伸氏(プロダクト・デザイナー | 法政大学)、内山恵梨香氏(FirstMake)、Mind the Gap チーム(Google Japan)を外部講師とした特別講義を実施した。

本講座では、1 学期はプログラミング等の知識・技能の修得、2 学期は思考・発想手法やフレームワークの実践、2 学期末から 3 学期には課題製作を主なテーマにしている。この他、外部講師による特別授業や校外学習を実施し、学外で開催される様々なワークショップやコンテストを紹介し参加を推奨している。そのようなスケジュールの中で、「文化と表現」領域に属する 3 講座が合同で実施したフィールドワーク報告会及び中間報告会・講座内発表会・SGH 成果報告会で探究成果を発表する。



図 2.2.3.A-1 Sony ものづくりワークショップにて
自前の写真を IC と AgIC ペンを用いて加工



図 2.2.3.A-2 Technical Evangelist 渡辺氏による
IT に関する特別講義 (Microsoft 校外学習)



図 2.2.3.A-3 自作イラストがレーザー加工機で
刻まれる様子を観察 (Sony 校外学習)



図 2.2.3.A-4 Product Designer 安積氏による
デザインに関する特別講義

(3) 実施効果

今年度は、教員が作成した資料だけでなく、オンライン学習サイトを校内でも使用できるようにしたことで、放課後や自宅でも学習することができるようになり、生徒の探究活動が深まった。

次年度への課題としては、オンライン学習について、はじめは授業内で一斉に挑戦し、以後は各自のペースで進めながら記録シートに日付を書く方式としたが、続けられる生徒と続けられない生徒とに分かれてしまった。続けられない生徒には「次週までにできる現実的な予定」を立てるように指示するも、予定した進捗を達成できなかった。単純な予定を計画的に達成できないようでは探究活動を計画的に遂行することは困難であるため、次年度は改善が必要である。

また、探究活動は休み時間や放課後を含む課外の時間を各教科や部活動、塾、習い事などと取り合っている。その中で、探究に関わる活動への優先順位付けも課題である。個と集団における時間と場の使い方、実現可能な計画を立案する技能、計画を遂行する技能、ならびに現実に合わせて計画を修正する技能が生徒には求められる。

2.2.3.B. 音楽のグローバル化

(1) ねらい

本講座では、本校における SGH 研究開発の概要と中央教育審議会答申(「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」)を踏まえ、いわゆる「知識基盤社会」の時代において「芸術科 (音楽)」における「探究型の学習」導入の有効性と、基礎的・基本的な知識の習得をはかるとともに、グローバルな視点での思考力や判断力、また音に依らない表現力の向上をもって、生涯に渡って音楽を愛好する精神を確立することをねらいとした。

(2) 内容

芸術の持つ文化的な諸問題自体は、生命や社会生活をおびやかすような喫緊の課題と顕著に結びつく事象は少なく、受講生にも課題の設定から戸惑う場面もしばしば見られ、教師の側からある程度の課題設定の方向性を示す必要もあった。しかし、従来の「芸術科(音楽)」では指導が困難であった、パワーポイントの作成やレジュメのまとめ方、また思ったことや感じたことを具体的かつ効率良く表現し、事実を正確に理解し伝達し情報を分析・評価し論述するといったスキルは、今後の「芸術科(音楽)」の新機軸となり得る指導内容・方法でもあり、本講座の一年間にわたる体験的な学習活動によって、教科の特性に基づいたこれらの効果を検証できるのではないかと考え、以下の内容で探究活動を行った。

本講座で「芸術科(音楽)」における新しい視点として重視した生徒の活動は、フィールドワーク、問題点の認識と作業仮説の設定、プレゼンテーションと討議のスキル、論文の作成の4点である。履修は高校2年生8名。内、必修選択芸術科(音楽)選択者は5名である。上記の新しい視点と「芸術科(音楽)」における教科の目標と照らし合わせながら、以下のスケジュールで講義を実施した。

4月	基調講義「音楽のグローバル化とは」(国立音楽大学 副学長 久保田慶一氏)
5月	フィールドワークと講義「文化の持続性について」(文化庁 小林宏氏)
6月	ゲストスピーカーによる講義「課題の見出し方」(現代音楽研究家 辻浩美氏)
7～8月	課題の認識と作業仮説の設定、夏季休業を利用したフィールドワーク
9月	講座内でのプレゼンテーション
10月	領域ごとのプレゼンテーション
11月～	資料収集と論文作成
1月～2月	ゼミナール方式によるプレゼンテーションと討議
3月	成果発表会

(3) 実施効果

受講生が探究活動を進めるに当たって設定した課題は以下の通りである(課題設定までの仮題も含む)。目に見える文化的な問題点として予想される「日本音楽の紹介・保護」といった内容にとどまらず、医療から地域の経済活動まで様々な分野に渡って設定されており、従来の「芸術科(音楽)」ではまず扱われない内容でもあり大変興味深いものである。

- 伝統音楽の保存法
- 音楽療法のデータ化
- 音楽を使つての支援活動の良さ
- 雅楽の保存と普及について

- 日本の伝統音楽を発展させるにはどうしたらいいか
- 邦楽と西洋音楽の融合の可能性
- 音楽による地域活性化は可能か

また、従来の芸術科における授業との相違点や、それによってどのような力や視点が身についたかということについて、受講生を対象に自由記述によるアンケートを実施した。フィールドワーク等の活動を通して、音楽という教科では図ることのできない「グローバルな視点」が育まれたことや、パワーポイントを用いた表現方法のスキル習得、学習意欲の向上などの記述が見られ、探究型の授業を導入することには一定の成果があると思われる。

以下は受講生のアンケート結果を、項目ごとに分けたものである。

<本講座の授業の形態について>

- 美術は個人の活動に近くあまり客観的な意見は取り入れられないが、「音楽のグローバル化」は音楽に関するトピックについて、異なる視点からの考察や、世界というマクロな観点から得られるものが大半で、情報量などの点で大きな差があった。
- 書道の授業と違い、1つの授業として考えたとき、比較的アクティブかつ自由度が高かった。

<本講座を受講することによって得られた視点の変化について>

- オペラやミュージカル、伝統音楽や合唱などと違い、「音楽のグローバル化」では、音楽を医療や経済と絡めて考えている。
- 演奏を通して歴史を学んだりしていたが、文献や専門家の話を通してグローバル化について考えた。
- 音楽は医療、国際など、割といろいろなところに結びつけられるのではないか。
- わかりやすいプレゼンをするために大きな声でゆっくりと話すことへの意識など。

<本講座によって認識された「音楽のグローバル化」について>

- 音楽は様々な力を持っているということ。音楽は震災や発展途上国を救うことができ、地方の活性化にも役立つ。日本での音楽活動(救済活動的なもの)は他国と比べて遅れているように感じた。
- 「音楽療法」をテーマに探究してきたが、ヨーロッパなど欧米のほうが音楽療法の制度や療法士資格などの認識や意識が高いとわかった。他国の具体的な療法を見たときに、海外の例を参考にして日本に取り入れるのは、これからの発展にもつながると思うが、日本の楽器がもつ良さなどにも着目して、日本楽器とコラボした療法も生み出せるのではないかと考えるので、それらを海外に発信できれば新たな結果や効果が得られるのではないかと思った。
- 他国からデータ化の仕方や音楽療法についてさらに詳しく学びたい。
- 雅楽の認知度の現状や、世界に広めるための具体的な方法を調べたとき、本来の音楽の形が失われるなど、グローバル化が必ずしも利点ばかりではないということがわかった。

2.2.3.C. 言語に依存しない情報発信

(1) ねらい

本講座は、言語に依存しない方法を用いて社会的課題を解決するためのアイデアを創意工夫し、具体的な改善案を提案する探究活動である。探究の過程で多くの解決すべき社会的問題を調べて比較検討することによって社会的課題についての知識を広げ深めること、問題を分析して本質を見極めることで言語に依存しない方法で解決できる課題を選び出す分析力と判断力を磨くこと、課題を解決する具体的な提案を探究することで言語に依存しないグローバルな表現力を高めること、探究過程の協働やコミュニケーション活動を通して協働力やコミュニケーション力を高めることがねらいである。

(2) 内容

非言語的表現によって問題解決をするための探究活動を行うことを、様々な例を提示しながら繰り返し説明してきた。

4月には、東京都美術館で「プレフィールドワーク」を行い、美術館の見学を実施した。作品搬入口や作品保管室の建築的空間や様々な表示は、作家や搬入業者などスタッフのみが利用することを想定して作られているため、観客の利用を中心に考えられた展示会場やロビーなどの空間や表示と比較して異なる点が多い。例えば、エレベーターの構造や使用方法1つをとってみても、大きさ、ドアの構造、ボタンの形状や位置、ボタンを押してからドアが閉まり動き出すまでの操作のシステムなど、注目すべき相違点がある。「プレフィールドワーク」は、5月の「班別フィールドワーク」の際に見学場所で注目すべきポイントを見過ごさないための練習という目的で行い、「裏」と「表」の構造やシステムを比較することで、問題点として注目すべき点を発見し、問題解決の工夫点を例示した。美術館の「裏」と「表」の違いは、「美術品の移動のための構造」と「観客の移動のための構造」の違いであり、その違いはどのように異なる情報を発信し、どのような問題を解決しているのかについてヒントを与えながら見学を終え、「班別フィールドワーク」につながることを期待した。

5月には、各自が設定した探究テーマに応じて班を作り、「班別フィールドワーク」として美術館、病院、企業などを訪問した。訪問先への交渉や依頼も生徒自身が行うので、希望の企業に断られて訪問できなかったことで設定したテーマを見直し変更した班もあった。また、予定通りに企業訪問を行ったが、探究テーマに結びつける有効な情報を発見できなかったためテーマを変更した班もあり、当初4班4テーマで探究活動がスタートしたが、後半は3班3テーマでの探究活動となった。

なお、探究内容は以下の通りである。

- 「子どもが安心して利用できる病院づくり」
…病院の待合室の構造やシステムを見直し新しい提案を目指す
- 「ストレスフリーな社会の実現」
…学校の環境や構造、教育のシステムを見直し新しい提案を目指す
- 「ポスターによる情報発信」
…効果的な視覚的メディア表現と活用法の提案を目指す

(3) 実施効果

新設科目であったことも影響しているかもしれないが、そもそも内容が、語学を得意とする

本校生徒にとって盲点のような、言語に依存せず問題解決を探究する講座であるため、第一希望でこの講座を選ぶ生徒は少なかった。しかし、本講座では探究テーマとする社会的問題に内容的な限定が無い場合、受講講座の変更による探究意欲の低下は見られず、意欲的に探究活動を進めることができたことは評価できるのではないだろうか。

一方で、課題としては「班別フィールドワーク」、「探究テーマの設定のしかた」の2つが挙げられる。「班別フィールドワーク」に関しては、実施後の報告会での各班の発表において「プレフィールドワーク」の経験を生かしている点が見られたのだが、探究活動が進むにつれて「フィールドワーク」や「班別フィールドワーク」の経験が薄れ、それ以外のインターネット情報や他の体験の影響によって、予期していない方向へと流されてしまった班がある。5月以降「班別フィールドワーク」の機会をどの時期に何回設定すべきなのかは、次年度の授業計画において再検討したい課題である。「探究テーマの設定のしかた」に関しては、今回は「班別フィールドワーク」後にテーマを変更した班があり、その班は最後まで遅れを取り戻すことができなかったため、途中でテーマを変更することなく最初に決めたテーマで探究を続けるように指導すれば、「班別フィールドワーク」も生かされ、より良い探究となったのではないかとも思われる。しかし、最初に設定したテーマが探究の対象として無理がある場合もあり、変更しなければ問題解決の提案など不可能なものもある。最初はよくわからないまま、漠然とした問題、大きな問題、難しい問題を選んでしまうケースが多かったからである。柔軟性があり、フィールドワークやその後の探究によって微調整が可能な探究テーマを最初から設定できることが望ましいが、探究がかなり進まない問題解決を導き出すことの難しさに気づかないまま探究テーマを決めてしまうこともあった。その問題解決が難しいということに早い時期に気づいた班は、具体的な解決案を提案することが可能な問題へとテーマを修正しながら、テーマと解決案の相互の対応関係を明確にして、有意義な提案を導き出すことができた。しかし、難しすぎる問題をテーマに選んでしまうと、テーマについて調べるだけで時間がかかりすぎ、解決案を提示することが困難だと気付くのが遅すぎて修正が間に合わない。テーマ設定の困難さに気づくのが遅い班は、話し合いや議論が少なく、上手く協働できず分業しての調べ作業が多く、集まって議論することで提案する問題解決案を吟味し絞り込むところまで至らなかった。他の講座と異なり、テーマの限定がない探究講座なので、テーマの絞り込みについては指導を入れるタイミングの見直しが必要かもしれないし、ある程度の絞り込みや限定も必要かもしれないとも考えるが、指導が早すぎると生徒はその真意を理解できないし、遅すぎれば有意義な問題解決を提案するに至らない。結論的には、テーマ決定は生徒の自主性に任せ、探究過程でテーマ修正の必要性に自ら気づき、テーマを柔軟に修正しながら探究を進めるという探究のプロセスを強く指導すべきと考えている。ただ、テーマ修正は、ある意味テーマのブレでもあるので、振幅が大きくなりすぎるとテーマが二転三転し、何を探究しているのかわからないという事態に陥る危険性も孕んでいるため、今後慎重に検討していくべき課題である。

2.3. 3年次必修「持続可能な社会の探究Ⅱ」（総合的な学習の時間）

(1) ねらい

今年度は「持続可能な社会の探究Ⅱ」(必修2単位)において、3年間のSGHの取組のまとめとして、これまでの探究の成果や各教科の学習内容、身に付けた技能や資質を生かしてクラスごとに全員参加で英字新聞を作成した。The Japan Times及び一般財団法人英語教育協議会(ELEC)との提携により一般社団法人グローバル教育センター(GEIC)が開発したプロジェクトに参加し、「全国中学校・高等学校英字新聞コンテスト」(以下、英字新聞甲子園と呼ぶ。)に作成した新聞を出品する。

「持続可能な社会の探究Ⅱ」のねらいは以下の3点である。

- ・「持続可能な社会の探究Ⅰ」の探究成果や既習の知識や技能を活用して、読み手を意識した英字新聞を作成することができる。
- ・新聞作成チーム(記事1本を担当する3~6名のグループ。以下、チームと呼ぶ。)に各生徒が協働的・主体的に関わり、コミュニケーションやディスカッションを通して学び合い、課題や場面、状況に応じて自律的に活動を進める姿勢を伸ばす。
- ・作成した新聞を基に、担当した記事やその内容に関連した事柄、自身の考えについて、メモやアウトライン、数枚のスライドを用いて、英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる。

(2) 内容

主な活動内容(活動の過程)は以下の通りである。

- ①「持続可能な社会の探究Ⅰ」で課題追究を行った成果や課題の共有を図る。
- ②編集部(4~6人)を編成し、編集長のリーダーシップの下に、チーム及びクラス全体で協議し、クラスごとに紙面割・及び記事の内容を決定する。
※担当教員と編集部で打ち合わせを行い、授業中の話し合いや運営などは極力生徒が中心に行えるようにした。また、各編集部員が担当するチーム(8~10チーム)を決め、各チームの進捗状況の把握やチーム内の個人の取組に対する指示や指導を行うようにした。
- ③「英字新聞作成テキスト」(GEICより各生徒に配布)を用いた学習や、新聞作成プロセスの確認・修正を行う。
- ④記事の添削をチーム内及びチーム間で行うとともに、編集部は、全ての記事の校正及び紙面の全体構成や内容のバランスを踏まえた指導や支援を行う。
- ⑤本プロジェクトの取組について、自己・相互評価を行うとともに、次年度の生徒に向けたアドバイスやコメントを書く。
- ⑥完成した記事を鑑賞し合い、それぞれの新聞の特徴やこれまでの取組の成果や課題を共有するとともに、英語による簡単なプレゼンやディスカッション、質疑応答などを行う。

(3) 実施効果

互いにコミュニケーションを図り、異なる視点や立場を調整しながら、これまでに培った技能や知識を活用し、汎用的能力や資質を伸ばす機会として、学年全員の生徒が参加して英字新聞を完成させたこと自体が、汎用的能力や資質のアウトプットであったと考える。特に、3年菊組の新聞は「英字新聞甲子園」において、「外国メディア賞」を

受賞した。「調べたことを基に、グローバルな問題を高校生独自の視点から切り取って記事としてまとめたこと」などを審査員からは評価していただいた。既習知識・技能の活用や協働性、主体性の大切さについての気づき、自己の取組を振り返る力については、以下の生徒の振り返りのコメントからも伺うことができる。

<参考：取組の成果にかかわって（生徒の振り返りより）>

①「英字新聞甲子園」に学校代表として参加した生徒のコメント

- ・客観的に物事をとらえてそれを英語で客観的に表現することの難しさを学んだ。また、身近な話題やグローバルな問題を英語で表現することの大切さに気付くことができた。出典や論理の明確化，データの使用の適切さも大切である。

②個々の生徒の自己・相互評価の記述（一部抜粋）

- ・元々私は人とコミュニケーションをとったり会話をしたりすることが苦手だが、昨年度の「グローバル総合」などの活動やブレインストーミングの経験がかなり生きて円滑に話し合いを進めることができたように思う。
- ・自分で全て進めようとするのではなく，互いの進行状況を確認しながら他の人にアイデアをもらうことも大切だと感じた。
- ・チーム内で意見が煮詰まったら，他チームの人や先生も巻き込むとうまくいく。
- ・図書委員や体育祭実行委員などで集団をまとめる経験が役に立った。
- ・「情報」のPCの技術や「政治・経済」で学習した選挙に関する知識が生きた。
- ・「英語表現」で長い英文を書いたり「探究Ⅰ」で成果をまとめて発信したりした経験が役に立った。伝えたいことを英語で端的に表現する練習はやっておくとよい。
- ・自分で思いついたり考えたりしたことは間違っているかもしれないが，新しいアイデアが生まれるきっかけとなることもあるのだから，発信することが大事だ。

③「英字新聞作成という本プロジェクトへの取組に特化して考えたときに，振り返って必要だと思ったこと，感じた課題は何ですか」という自己評価の問いに対して，学年の約52%が，集団の中で異なる意見や立場，個人の特長を踏まえたうえで率直に意思伝達をする難しさや必要性を挙げた。



図 2.3.1 実際に作った弁当を試食しながら地産地消について記事を作成しているチームの様子

以下の課題については，各教科・分掌等と連携を図りながら改善を図っていきたい。

- ・当初の計画より約1か月半新聞完成時期が遅れ，3年生の大学入試準備との兼ね合いから，予定していた英語によるプレゼンの機会がもてなかった。
- ・作成途中段階で，各クラスの編集部がそれぞれのクラスの課題や成果を共有し，自分のクラスの取組に反映させるなどの機会を持つことができなかった。
- ・探究したことを基に英文記事のフォーマットで英語を書くことに慣れておらず，英語のライティングに関する指導や十分なガイダンスが必要であった。

2.4. 研修活動

2.4.A. イオン アジアユースリーダーズ

(1) ねらい

「持続可能な社会の探究Ⅰ」を受講する2年生のうち、アジアの環境問題に関心の高い生徒を、イオン1%クラブが主催するアジアユースリーダーズに派遣し、異なる文化的・社会的背景を持つ海外の高校生とともに環境問題を解決するための具体策を検討したり、異質な意見をまとめたりする経験を通して、公共性と倫理性、リーダーシップを備えた未来のグローバル・リーダーの育成を図ることをねらいとする。



図 2.4.A-1 Siam Park にて

(2) 内容

- ① 実施日程 2016年8月20日(土)～27日(土)
- ② 渡 航 先 タイ王国(バンコク)
- ③ 参加生徒 2年生5名
- ④ 引率教員 菊池 美千世(副校長 地理)
- ⑤ 研修行程

1日目 Orientation, Welcome Reception

2日目 Icebreaking Activity at Thammasat

University and MahBoonKrong Center

3日目 Lectures about “Water Quality Control / Management, Siam Park Visit

4日目 Bansue Environment Conservation Center Lecture

Dindaeng Environment Control Plant Visit

Interviewing citizens at shopping center

5日目 Group Discussion

6日目 Presentation, Evaluation Meeting, Award Ceremony & Farewell Reception

⑥ ディスカッションテーマ

From the perspective of citizens, what kind of campaigns can you come up with to raise people’s awareness about cleaning river and canal in Bangkok ?



図 2.4.A-2 ディスカッションの様子

(3) 実施効果

異なる文化的・社会的背景を持つアジア6カ国から参加した高校生たちと話し合いを進める中で、それぞれが前提としている生活環境や教育、政治・経済のありようが異なるため、議論が噛み合わない場面が少なからずあり、グローバルな課題の解決が容易ではない事に気付くことができた。一方、話し合いを通じて共通のゴールを目指す体験を通して、価値観の多様性の尊重、異質性だけでなく共通性を見いだす事の重要性、異なる文化的背景を持つ人々と交流する難しさ楽しさなどを学ぶことができた。

また、アジア各国から参加した高校生の言語運用能力、グローバルな課題解決に対する高い志、積極性などにも刺激を受け、未来のグローバル・リーダーを目指して努力しようとする意欲が高まった。その結果、研修参加後の学習成績が向上するとともに、課題研究においても広い視野から自らの設定したテーマを探究しようとする姿勢が顕著になった。

2.4.B. 台湾研修

(1) ねらい

「未来のグローバル・リーダー」としての資質や能力を養うため、生徒に国際的な経験を積む機会を提供することをねらいとして、今年度も台湾研修を実施した。より具体的には、本研修により、生徒が授業等での課題探究型学習を通して培った知識や探究手法、課題意識等を生かして、自分とは異なる関心・目的意識を持ち、異なる文化・価値観の下で生まれ育った海外の同世代とともに議論・協働して、課題の発見・設定を行い、その解決を図る能力や、英語で自らの意見や提言を他者に伝え、議論を深めることのできる力を養うことをめざした。

なお、参加者の募集にあたっては、研修の目的を以下の通りに生徒に示した。

「未来のグローバル・リーダー」としての資質・能力を養うため、以下を研修目的として掲げ、研修を通じて得た経験・能力等を今後の学習や進路決定にいかすこととする。

- ①授業等での探究的な学習を通して培われた問題意識、知識や探究手法を活かし、課題設定を行い、その解決を図る能力を育む。
- ②外国語によるコミュニケーション・ディスカッション・プレゼンテーション能力の向上を図る。
- ③海外における国際交流・異文化体験の機会を得る。

(2) 内容

今年度は、第2学年の全ての生徒がグローバルな課題に対する課題研究をより深められるよう研究開発計画を変更し、2年次に開講されてきた「持続可能な社会の探究Ⅰ」(必修, 1単位)と「グローバル総合」(選択必修, 1単位)を融合させて、「持続可能な社会の探究Ⅰ」(必修, 2単位)を設置した。この変更にともない、従来「グローバル総合」を選択した生徒の課題研究の一環として実施してきた台湾研修についても、その位置づけや実施方法について大幅な変更が必要となった。

研究開発計画変更の趣旨に沿って、第2学年の全ての生徒に参加の機会を提供できる形での変更をめざし、参加生徒の募集や選考、事前指導の内容・日程・指導担当者等について、昨年度までの成果をふまえ、研修のねらいを十分に達成できるよう検討を重ね、以下の通りに実施した。

① 実施日程: 2016年10月19日(水)～22日(土)

② 渡航先: 台湾(台北市)

③ 参加生徒: 2年生30名

i) 参加生徒決定までの流れ

2016年3月8日 1年生全員を対象として、台湾研修の概要を説明する会を実施。

2016年4月8日 参加希望者が、申請書(志望理由、台湾で行うディスカッションに向けた自主学習計画、自己PR、健康状況、海外経験の有無等)、事前課題レポート、誓約書を提出。

2016年4月後半 応募者の提出書類等を審査し、応募者の課題探究型学習や海外研修に対する意欲・目的意識・取組の内容・学習姿勢に加え、学力・語学力等を総合的に勘案して参加生徒を決定。

ii) 応募状況等

31名の応募があり、審査の結果31名全員の参加を認めたが、途中で1名が健康上の理由等により参加を辞退したため最終的な参加者は30名となった。

④ 引率教員:菊池美千世(副校長), 朝倉彬(理科教諭), 増田かやの(養護教諭, 保健体育科教諭)

⑤ 保護者対象の説明会:2016年9月18日(日)15:30~16:30 大学本館125号室
 研修日程や内容, 事前学習の進捗状況に加え, 引率教員, 研修費用の払い込み方法, 旅行保険, 緊急時の連絡体制, 服装・持ち物等についても説明した。

⑥ 事前学習

事前学習については, (i)台湾研修の中で課題研究の一環として活動するための学習, (ii)台湾の歴史や文化, 地理, 現状等に関する学習, (iii)語学学習を実施した。昨年度までは「グローバル総合」の講座における課題研究の一環として台湾研修を実施していたため, (i)と(ii)は「グローバル総合」の授業時間内に行っていたが, 今年度は「持続可能な社会の探究Ⅰ」の特定の講座の生徒のみを対象とするのではなく, 第2学年の生徒全員を対象として参加者を募集したため, 全ての事前学習を授業時間外に実施することが必要となった。そのため, 事前学習の時間確保が大きな課題となった。(i)~(iii)の全てにおいて, 昨年度に比べて授業時間外の前学習時間が増えており, 生徒にとっては事前学習の負担が大きくなったといえる。

また, 「持続可能な社会の探究Ⅰ」の講座の外で台湾研修を行うため, 参加生徒がそれぞれの課題研究の一環として台湾研修を活用できるよう支援することが必要となった。この課題に関しては, 昨年度までの経験と成果を踏まえ, 研修参加生徒に台湾研修が課題研究の一環として実施されていることを意識させ, 課題研究のための情報収集等の場として十分に研修を活用するための準備として事前学習に取り組むよう働きかけることにより, 解決を試みた。事前学習の詳細については, 以下の通りである。

i) 台湾研修の中で課題研究の一環としてフィールドワークを行うための準備

今年度の研修には, 「持続可能な社会の探究Ⅰ」の7講座の全てからそれぞれ1~8名

表 2.4.B-1 課題研究班の構成

班	人数	ディスカッション領域	ディスカッションテーマ	探究Ⅰの講座別人数
1	3	ジェンダー	女子教育とステレオタイプ	国際協力とジェンダー2, 国際関係と課題解決1
2	3		世界の女子教育	国際協力とジェンダー2, 音楽のグローバル化1
3	4		女性の社会進出: 日本と台湾を含む他国との比較	国際協力とジェンダー3, 言語に依存しない情報発信1
4	5	環境・地域	食品ロス	経済発展と環境5
5	2		再生可能エネルギー	経済発展と環境2
6	4		防災・減災	国際関係と課題解決4
7	3		人口集中と地方創生	国際関係と課題解決3
8	3	科学技術	臓器移植	生命・医療・衛生3
9	3		情報技術と創造力	情報技術と創造力3

表 2.4.B-2 課題研究に関する事前学習スケジュール

日時	形態	内容
5月10日(火) 15:30~16:30	説明会	・研修参加生徒全員の顔合わせ ・事前学習に関する説明 ・台北一女来校(5/26)時のランチミーティングに関する説明
5月13日(金) 15:30~16:00	全体ミーティング	台湾で行うディスカッションテーマの方向性について決定
5月26日(木) 9:00~13:00	グループワーク	台北一女の生徒(45名)とのランチミーティング
6月1日(水) 15:30~17:00	説明会	・事前学習計画作成に関する説明 ・英語学習に関する説明
6月1日(水) ~7月7日(木)	グループワーク	各班が台湾で行うディスカッションテーマを決定し、研修までの課題研究の計画を立てる
7月8日(金) 15:30~15:45	中間報告会1	ディスカッションテーマ及び課題研究計画を報告 → 研修担当教諭より改善点を指摘
7月7日(木) ~7月14日(木)	グループワーク	ディスカッションテーマ及び研究計画の改善
7月15日(金) 15:30~16:30	ミーティング	・ディスカッションテーマ及び課題研究計画の改善案を提出 → 不十分なものは7月中に再提出 ・夏休みの英語指導スケジュールの確認
7月16日(土) ~8月30日(火)	グループワーク	各班で計画に沿って課題研究を進める ①ディスカッション時のプレゼン内容について、研修担当教諭に報告 ②指摘された点を改善しつつ、英語でプレゼンする準備を進める ③英語のスライドを作成し、外国人講師の指導を受ける(8/22~24)
8月31日(水) 10:00~12:00	中間報告会2	各班がここまでの研究成果を日本語で発表する → 質疑応答 自己評価、相互評価、教員からの評価を実施
9月1日(木) ~10月18日(火)	グループワーク	中間報告会での評価をふまえ、各班で課題研究を進め、プレゼン内容の改善を行う
9月23日(金)~	中間報告会3	台湾研修で行うプレゼンのリハーサルを実施 → 外国人講師による英語の使い方等の指導
9月23日(金) ~10月18日(火)	グループワーク	外国人講師の指導をふまえ、課題研究を進めつつプレゼンを改善

ずつが参加したため、全ての講座で行われている課題研究のフィールドワークとなるようなプログラムを組むことは不可能であった。そのため、基本的には前年度の「国際協力とジェンダー」のプログラムを踏襲し、台湾大学の学生や台北市立第一女子高級中学の生徒とのディスカッションを課題研究の一環とするようプログラムを組むこととした。

課題研究は、ディスカッションの効果を考え、3名程度で班を構成して進めることとした。しかし、「持続可能な社会の探究I」の同じ講座から参加した生徒がいない場合等、「持続

可能な社会の探究 I」において同じテーマで探究学習を進めている生徒がグループを組むことは難しく、数度にわたる調整を経て、表 2.4.B-1「課題研究班の構成」に示した 9 班に分かれて事前学習に取り組むこととなった。ジェンダー領域の 1～3 班が、2 講座に所属する生徒から成る混成班となったほか、4 人以上の班が 3 つできたが、生徒が自発的に設定したテーマについて課題研究することを重視し、この 9 班で事前学習を進めることとした。

課題研究に関する事前学習のスケジュールと概要は表 2.4.B-2「課題研究に関する事前学習スケジュール」の通りである。可能な限り「持続可能な社会の探究 I」の所属講座における課題研究とリンクさせるよう指示し、内容については所属する講座の担当教諭に相談するよう指導した。海外研修担当教諭からは、テーマ設定が適切かどうか、プレゼンの構成が適切かどうかなど一般的な探究的な学習のスキルに関する指導と、台湾でのディスカッションを通してどのような情報を得たいのかを明確にするよう等の助言を行った。

ii) 台湾の歴史や文化、地理、現状等に関する学習

・応募時に提出させた事前課題レポート

春休みに課題図書リストから 2 冊以上を選んで読み、レポートを作成させた。内容が不十分であった生徒(10 名)については、足りない点を指導した上で、レポートを再度作成させた。

・第 2 学年の必修科目である「日本史 A」「世界史 A」において、台湾について丁寧に扱うことを担当教諭に依頼し、事前学習の一部とした。

・二・二八事件と白色テロに関する特別講義(2016 年 10 月 14 日、担当:玉谷直子)

iii) 語学学習

(英語) *以下の外国人講師は、SGH 予算により雇用している外国人講師である。

6～7 月

- ・お茶の水女子大学プレサマープログラム(全 5 回、各 3 時間)に 3 回以上参加
- ・外国人講師による英会話講座(1 時間×5 回、1 クラスは 7～8 人で編成)

8 月

- ・外国人講師による各班の英語でのプレゼンテーションで使用するスライド作成指導(各班 1 時間程度)

9～10 月

- ・外国人講師による各班の英語でのプレゼンテーションの準備指導(各班 1 時間×1～2 回)

(中国語)

- ・お茶の水女子大学大学院生である中国からの留学生を講師として、2016 年 9 月 27 日(火)・28 日(水)16:00～17:00 に講習会を実施した。生徒には 1 回以上の参加を義務付け、挨拶や自己紹介、マナーについて学ぶ機会を提供した。

iv) その他

- ・養護教諭より研修期間中の健康管理に関する保健指導を実施(2016 年 10 月 14 日)
- ・レセプション時の挨拶や出し物(空手、けん玉、ソーラン節)等の準備

⑦ 研修スケジュール

研修スケジュールは、表 2.4.B-3「台湾研修スケジュール」に示したように計画した。悪天候等のトラブルもなく概ね予定通りに実施できた。しかし、台北市立第一女子高級中学にお

ける人権に関するディスカッションが予定時間を超過したことや、ディスカッションの成果を領域内で共有する計画が全ての参加生徒で共有する形に急遽変更になったこともあり、課題研究に関するディスカッションの時間が予定より短くなってしまった。

表 2.4.B-3 台湾研修スケジュール

月日(曜)	現地時刻	スケジュール
10/19 (水)	7:30	羽田空港集合
	10:05	羽田空港出発
	12:30	台北松山空港到着。入国審査、通関。
	14:00	故宮博物院見学(約2時間) 台湾原住民博物館見学(約1時間)
	17:50	夕食:台湾料理
	19:30	ホテル到着
	10/20 (木)	9:00
11:00		台湾市日本工商会表敬訪問 前田吉徳氏(総幹事)講話
14:00		台湾大学訪問 ・キャンパス見学 ・台湾大学学生との班別ディスカッション
17:30		夕食:広東料理
19:30		ホテル到着
10/21 (金)		8:50
	9:00	・歓迎セレモニー(ホームステイパートナーとの対面、学校紹介等)
	9:30	・学校内の見学
	10:00	・台北二・二八記念館見学
	11:00	・蔡焜霖氏講話「白色テロの体験から人権を考える」
	12:00	・昼食
	13:00	・台北一女の運動会練習(リレー)を見学
	13:30	・午前中の見学と講話をふまえ、人権に関するディスカッション
	14:20	・3つのディスカッション領域に分かれて、課題研究テーマに関する意見交換 ①班別に両校の生徒が事前学習の成果をプレゼンテーション ②テーマに関する班別ディスカッション ③各班のディスカッション成果を、領域内で共有するためのプレゼンテーション
	16:15	・交流終了のセレモニー(両校の出し物等)
16:45	ホームステイ先に出発	
10/22 (土)	12:00	台北第一女子高級中学に集合
	12:30	台北第一女子高級中学を出発 昼食後、空港へ
	16:45	台北松山空港出発
	20:50	羽田空港到着後、入国、通関し、解散

⑧ 事後学習

・「2016 年度台湾研修旅行報告書」(以下の各項目についてそれぞれ 300～2000 字程度で作成)提出

項目 A 自分の探究を深めるために、台湾研修中に取り組もうと計画していた活動

B 台湾研修に参加して学べたこと

i) 参加前の計画は達成できましたか? できたこと、できなかったことを具体的に報告してください。

ii) 予想外に得られた、自分の探究に役立つような内容

iii) 台湾の社会や文化、歴史等について学べたこと

iv) その他(事前学習、渡航準備、北一女生との交流等のようなことでも可)

C 台北研修で得たことを、今後の「持続可能な社会の探究 I」の論文作成にどのように活かしていくのか(直接的な資料・データ、新たに得られた関心・論点、自分の仮説の修正等 具体的に今後の探究活動の計画を立ててください。)

・1 年生に対する SGH 説明会における台湾研修の報告(3 班のみ)

(3) 実施効果

実施効果の測定は、研修参加生徒へのアンケート調査及び「2016 年度台湾研修旅行報告書」の評価によって行った。測定に際しては、本研修実施のねらいが達成されているかどうかに加え、昨年度と大幅に実施方法を変更したことによって、実施効果にどのような変化が生じたのかを確認することを目指し、生徒の意識調査の項目は昨年度を踏襲した。

① 事前学習について

事前学習については、学習効果と負担感について調査した。その結果は、表 2.4.B-4「事前学習に対する生徒の評価」に示した。多くの事前学習に対して、「とても役立った」と「まあまあ役立った」と回答した生徒の合計が9割を超えており、概ね生徒が効果的であると感じる事前学習プログラムを組むことができたといえる。しかし、「プレサマープログラム」(66.7%)、「中国語会話講座」(26.6%)は、評価が低かった(()内は「役に立たなかった」、「あまり役に立たなかった」と回答した生徒の割合)。特に、「プレサマープログラム」は26.7%の生徒が「役に立たなかった」と回答しており、非常に評価が低かったといわざるをえない。

また表 2.4.B-4 からは、「班別課題研究」(80.0%)、「課題研究講座外指導」(53.3%)「8 月の中間報告会」(66.6%)、「事前課題レポート」(90%)、「プレサマープログラム」(86.7%)を負担に感じていた生徒が多かったことが分かる(()内は「とても大変だった」、「まあまあ大変だった」と回答した生徒の割合)。今年度は事前学習を全て授業時間外に行ったため、生徒の負担感が増すことが予想されていたが、実際に生徒が大きな負担を感じながら事前学習に取り組んでいたことが確認された。しかし、本研修のねらいを考えると、課題研究に関する事前学習は十分に行う必要があり、また生徒たちも負担が重いと感じる一方、役に立ったとも感じているので、充実した事前学習を実現できたと評価してよいだろう。「プレサマープログラム」については、負担に感じている生徒が多い一方、役に立たなかったという生徒も多く、生徒の実態や要求にそぐわない事前学習であったと考えられる。本研修を通して、英語でコミュニケーション、プレゼンテーション、ディスカッションをする力を培うためには、生徒にとってより有益なプログラムを提供できるよう、改善すること

が必要であろう。

表 2.4.B-4 事前学習に対する生徒の評価

	事前学習の内容	内容に対する評価					負担に対する評価				
		とても役立った	まあまあ役立った	あまり役立たなかった	役に立たなかった	参加していない	とても大変だった	まあまあ大変だった	適切だった	少し足りなかった	足りなかった
① 課題研究	班別課題研究	53.3	43.3	3.3	0.0	0.0	40.0	40.0	20.0	0.0	0.0
	課題研究 講座外指導	40.0	53.3	3.3	0.0	0.0	13.3	40.0	40.0	6.7	0.0
	中間報告会(8月)	16.7	70.0	3.3	6.7	3.3	23.3	43.3	30.0	0.0	3.3
② 台湾	事前課題 レポート	23.3	63.3	13.3	0.0	0.0	26.7	63.3	10.0	0.0	0.0
	特別講義 (10月)	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.7	90.0	3.3	0.0
③ 語学学習	プレサマー プログラム	6.7	26.7	40.0	26.7	0.0	66.7	20.0	13.3	0.0	0.0
	英会話講座 (7月)	36.7	50.0	6.7	6.7	0.0	0.0	23.3	70.0	6.7	0.0
	英語プレゼン 講座(8-10月)	70.0	26.7	3.3	0.0	0.0	0.0	26.7	66.7	6.7	0.0
	中国語会話講座 (9月)	13.3	56.7	23.3	3.3	3.3	0.0	13.3	46.7	20.0	20.0

② 研修内容について

研修内容については、プログラムの内容と滞在(講義)時間に対する生徒の評価を調査した。その結果は、表 2.4.B-5「研修プログラムに対する生徒の評価」に示した通りである。内容について「とても良かった」と回答した生徒が 90%に達し、否定的な回答が全くなかったのが、「台北一女での交流」と台北一女生の自宅における「ホームステイ」であった。自由記述欄には「ホームステイで主に英語を使ったり、文化を教えていただいたりしたので、ホームステイの日数が増えるとよりよかった。」などの声が見られ、台北市立第一女子高級中学やホストファミリーのご協力により、非常に充実した時間を過ごせたことがわかる。

その他のプログラムについても「とても良かった」、「まあまあ良かった」と回答した生徒の割合は、最も低い「台湾大学生とのディスカッション」でも 83.3%以上となっており、多くのプログラムで 90%を超えている。今年度の研修内容が、様々な講座に所属して課題研究に取り組んでいる生徒にとって有益であったことが確認できる。ただ、「台湾大学生とのディスカッション」(33.3%)、「台北一女生とのディスカッション」(66.7%)については、時間が「全く足りなかった」、「やや足りなかった」と答えた生徒が他のプログラムに比べて多かった(()内は「全く足りなかった」、「やや足りなかった」と答えた生徒の割合)。特に、「台北一

表 2.4.B-5 研修プログラムに対する生徒の評価

見学地・プログラム	見学・訪問場所・講義内容としての評価				滞在（講義）時間に関する評価			
	とても良かった	まあまあ良かった	あまり良くなかった	良くなかった	長過ぎた	ちょうど良かった	やや足りなかった	全く足りなかった
故宮博物院	46.7	53.3	0.0	0.0	6.7	66.7	20.0	6.7
原住民博物館	26.7	56.7	13.3	3.3	43.3	53.3	3.3	0.0
女性政治家の講話	50.0	36.7	10.0	3.3	20.0	76.7	3.3	0.0
台湾市日本工商会での講話	63.3	36.7	0.0	0.0	3.3	96.7	0.0	0.0
台湾大学見学	43.3	56.7	0.0	0.0	3.3	83.3	13.3	0.0
台湾大学生とのディスカッション	33.3	50.0	10.0	6.7	13.3	53.3	33.3	0.0
ニ・ニ八記念館	66.7	26.7	6.7	0.0	3.3	83.3	13.3	0.0
蔡焜霖氏の講話	50.0	46.7	3.3	0.0	13.3	86.7	0.0	0.0
台北一女での交流	90.0	10.0	0.0	0.0	0.0	60.0	36.7	3.3
台北一女でのディスカッション	50.0	40.0	6.7	3.3	3.3	30.0	46.7	20.0
ホームステイ	90.0	10.0	0.0	0.0	0.0	60.0	33.3	6.7

女生とのディスカッションについては「全く足りなかった」と答えた生徒が 20%となっている。自由記述欄にも「ディスカッションをして、実際に現地の人から事前学習では知ることのできなかった新たな情報を得ることができた」という回答が見られる一方、「台北一女でのディスカッションで意見を深める時間が足りなかった」、「せっかくなたくさん探究していったのに、ディスカッションする時間はとれなかったの、きちんと確保するべきだと思う。」といった意見が多く見られた。このように、時間の不足が両プログラムの評価がやや低くなっている要因であることが確認できており、この点については改善が必要である。「故宮博物院」、「台北一女での交流」、「ホームステイ」についても、時間が足りなかったと答えている生徒が多いが、これらについては全体の日程を勘案するとこれ以上時間を割くことは難しい。

③ 帰国後の意識・態度の変化

帰国後の意識の変化に関しては、表 2.4.B-6「台湾研修参加後の意識の変化」に示した項目について、行動の変化に関しては、表 2.4.B-7「台湾研修参加後の行動の変化」に示

した項目について調査した。両表からは、多くの項目について、多くの生徒が意識及び行動の変化を自覚していることがわかる。これは、国際的な経験を積むことにより、未来のグローバル・リーダーとしての素養を培うという本研修のねらいが達成されていることを示している。特に、留学したいと考えるようになった生徒が 86.7%、海外で働きたいと考えるようになった生徒が 46.7%という値は昨年度と比較しても非常に高い。この態度の変化が、語学学習に対する意識・努力の変化に結びついていると考えられる。また、研修に参加した全ての生徒が「誰とでもコミュニケーションできる積極性を持ちたいと思うようになった」と答えている点にも注目したい。こうした意識の変化が、「持続可能な社会の探究 I」における課題研究や様々な教科の学習、関心を持ったテーマへの自主的な学びへの積極性に結びついていると考えられる。

昨年度の調査結果と比較すると、意識及び行動ともに多くの項目で値が上昇しており、課題研究の講座外で海外研修を実施することは、本研修のねらいを達成する阻害要因にはならないことが確認できたといえる。

表 2.4.B-6 台湾研修参加後の意識の変化

項目	2017 年度		2016 年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
海外の文化や歴史への興味・関心が広がった	96.7	3.3	97.6	2.4
日本の文化や歴史への興味・関心が広がった	83.3	16.7	71.4	28.6
科学技術、IT などへの興味・関心が広がった	43.3	56.7	28.6	71.4
国際政治や外交などへの興味・関心が広がった	80.0	20.0	64.3	35.7
国際的な経済活動への興味・関心が広がった	76.7	23.3	59.5	40.5
留学したいと思うようになった	86.7	13.3	54.8	45.2
海外で働きたいと思うようになった	46.7	53.3	23.8	76.2
語学力を高めたいと思うようになった	100.0	0.0	97.6	2.4
誰とでもコミュニケーションできる積極性を持ちたいと思うようになった	100.0	0.0	95.2	4.8
特に変化はなかった	0.0	100.0	4.8	95.2

表 2.4.B-7 台湾研修参加後の行動の変化

項目	2017 年度		2016 年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
海外のニュースや記事を積極的に視聴するようになった	53.3	46.7	54.8	45.2
関心を持ったテーマについて自主的に積極的に学ぶようになった	36.7	63.3	9.5	90.5
「持続可能な社会の探究 I」の活動により積極的に取り組むようになった	66.7	33.3	-	-
様々な教科の学習により積極的に取り組むようになった	53.3	46.7	47.6	52.4
語学力を高める努力をするようになった	93.3	6.7	71.4	28.6
英語の検定試験を受けるようになった	23.3	76.7	11.9	88.1
英語以外の検定、資格試験を受けるようになった	0.0	100.0	0.0	100.0
研修で知り合った友人と連絡を取り続けている	80.0	20.0	71.4	28.6

④ 「2016 年度台湾研修旅行報告書」より

本研修応募時に提出した事前課題レポートでは、最初に提出されたレポートの構成・内容が不十分で再提出に向けて指導しなくてはならなかった生徒が 10 名いたが、報告書に関しては 30 名全員が十分な水準に達したものを提出することができた。提出された報告書からは、研修中に何を学ぶかを明確にし、目的意識をもって研修に参加し、充実した学びの機会を得た生徒が多かったことが確認できた。ただ、研修内容に対する評価同様、台北一女でのディスカッションの時間が足りず、お互いの探究学習の成果を発表するにとどまり、情報収集はできたがディスカッションにより自分の考えを深めることが十分にはできなかつたと振り返っている生徒が多かった。その一方、台湾大学の学生や台北一女の生徒から情報を収集したほか、市街地の観察や人々の服装・持ち物の観察から情報を得てきた生徒もいた。さらに、帰国後にホームステイのパートナーらと LINE 等を通じて連絡を通り、探究活動への協力を得ている生徒もいた。

また、生徒たちが班別の課題研究に直接関係しない博物館の見学や講話からも多くの学びを得たことも確認できた。特に台北工商会の前田吉徳氏の講話については 15 名の生徒が触れており、二・二八記念館の見学や蔡焜霖氏の講話とも合わせて、「台湾の親日」について、近代の東アジア史を踏まえて理解を深めるとともに、国家やナショナルアイデンティティ等のグローバル化された世界で活躍する人材として知見を得ておくべき概念についても考察を深めることができた様子がうかがえた。朱鳳芝氏の講話については、「予想外に得られた、自分の探究に役立つような内容」の項目で触れた 5 名(内 3 名が「国際協力とジェンダー」の受講生徒)を含む 11 名の生徒が触れており、本研修が女性リーダーとしての生き方を考える機会ともなったことがわかった。

生徒の作成した報告書については、各班から 1 名を選択して報告書集を作成し、本研修に参加した生徒に配布した。また、3 月には 1 年生に対して次年度の研修についての説明を行うが、その際にもその報告書集を配布し、課題研究の一環として行われる海外研修のイメージを掴ませたいと考えている。

⑤ 概括

以上の調査結果からは、課題研究の講座外で実施された今年度の台湾研修は、生徒の「未来のグローバル・リーダー」としての資質・能力を養う国際経験を積む機会となったことがわかる。そのため、次年度以降もこの形で台湾研修を継続していくことが可能であると判断している。

一方、報告書からは、「持続可能な社会の探究 I」の所属講座で行っている課題研究と台湾研修中のディスカッションに向けた課題研究が異なるテーマとなってしまった生徒が 14 名もいたことがわかった。本研修を通して、課題を発見し解決する力を培うことをめざす観点からは、「持続可能な社会の探究 I」の担当者との連携をより緊密にし、この状況をできるだけ改善していくことも必要であろう。また、英語で自らの意見や提言を他者に伝え、議論を深める力を培う機会とするためにも、台湾大学の学生団体や台北市立第一女子高級中学の理解と協力を得て、ディスカッションの時間を十分に確保できるように工夫しなくてはならない。生徒からの評価の低い「プレサマープログラム」についても改善が必要である。現在は次年度の台湾研修をより充実したプログラムにできるよう、上記の改善点について検討している。

3. 教養教育グループの取組

本校では、従来より、各教科の授業の中で探究的な学習を取り入れた取組を行ってきているが、さらに SGH の取組を進めていく中で教養を高めたり、探究的な学習の土台となったりするような取組を行った。

特に、生徒が探究活動をしていく中で、統計データやグラフなどの数値を用いて考察しより論理的で説得力のある結論が導き出せるよう、1 年次必修「教養基礎『数学 I 』」の授業の中で、公民科と連携した取組を行った。また、2 年次に本格的な課題研究がスタートすることを踏まえ、探究の基礎となる知識・技能に関する特別講義「図書館を活用した探究の仕方」(お茶の水女子大学 図書・情報課課長による)を 1 年生全員対象で行う(3 月下旬実施予定)。

以下の項目について次ページより報告する。

- ・台北一女との交流
- ・自国文化理解教育 文楽・歌舞伎
- ・英語によるサマープログラム
- ・スペシャルタナーレクチャー
- ・ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム
- ・e-learning システムの活用
- ・教養基礎「数学 I 」特別授業「統計を用いた課題解決」

※インフルエンザによる学年閉鎖のため中止

SGH事業報告書

担当者: 土方伸子・玉谷直子

事業名	台北市立第一女子高級中学との交流
実施日時	2016年5月26日(木)8:30~13:00
場所	お茶の水女子大学附属高等学校及びお茶の水女子大学構内
対象者 (参加者数)	お茶の水女子大学附属高等学校 全校生徒 (355人)
主催者	お茶の水女子大学附属高等学校
実施概要	<p>2014年に交流協定を結んだ台北市立第一女子高級中学(以下、北一女)より、生徒44名と教諭3名、計47名が本校を訪問し、交流を行った。</p> <p>【交流プログラム詳細】</p> <p>8:30 北一女からの訪問団来校</p> <p>9:03- 9:48(2限) 歓迎レセプション: 全校生徒が参加, 司会は本校3年生2名(中国語, 英語) 両校校長挨拶, 北一女生徒代表挨拶及び学校紹介, 本校生徒代表挨拶, 北一女生ダンスパフォーマンス披露, 本校合唱部・箏曲部演奏披露</p> <p>9:56-10:41(3限) 北一女の生徒への本校の紹介等</p> <p>10:49-11:34(4限) 北一女の生徒が8組に分かれて、本校の授業に参加 参加した授業: 第1学年 コミュニケーション英語Ⅰ, 数学Ⅰ, グローバル地理 第2学年 漢文, 古文, コミュニケーション英語Ⅱ 第3学年 化学(選択授業), 物理(選択授業)</p> <p>11:42-12:27(5限) ランチ・ミーティング 北一女生徒(44名)と10月の台湾研修旅行参加予定生徒(31名)を5~6名の15グループに分けて情報交換等実施</p> <p>12:30-12:45 お茶の水女子大学構内の案内</p> <p>12:50 記念撮影</p>

アンケート集計結果

(回答数: 343人)

1. レセプションの内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 異文化への興味・関心が向上した	185人	54.1%	143人	41.8%	12人	3.5%	2人	0.6%
3. 進路の参考になった	31人	9.1%	116人	33.9%	151人	44.2%	44人	12.9%
4. 次の機会にも期待している	178人	51.9%	142人	41.4%	21人	6.1%	2人	0.6%
5. 台北研修に向けて有益なミーティングができた	18人	64.3%	7人	25.0%	3人	10.7%	0人	0%

※ 5のみランチミーティングに参加した生徒を対象としたアンケートである。

アンケート結果及び分析

レセプションは本校生徒が英語と中国語で司会を行い、本校校長が英語で挨拶をした一方、北一女の校長は中国語に日本語の通訳をつけて挨拶をされ、北一女生徒代表は日本語で挨拶及び学校紹介を行った。しかし、ほとんどの生徒がレセプションの内容を理解していたことがわかる。アンケートの自由回答欄には、「先輩が中国語と英語を駆使してレセプションの司会や挨拶をしている姿に憧れた。私もそうなれるよう、勉強したい。」との回答が多く見られ、学習意欲の向上にも効果があったことがわかった。また、同年代の生徒との交流は異文化への興味・関心の向上に効果があることがわかる。自由回答欄には、「もっとたくさん交流をする時間がほしかった」との声が多く、半日の交流では物足りなかった様子も見られた。「北一女の人たちは、はきはきと意見を言っていたので、私たちも自分の意見をはっきりと言えるよう、語学やさまざまな勉強を頑張らなくてはいけないと思った。」等の感想が多く寄せられ、短い交流の中からも多くの刺激を受けた様子が窺えた。

SGH事業報告書

担当者: 植田 敦子

事業名	自国文化理解教育(文楽)
実施日時	2016年5月19日(木)11:00~13:20
場所	国立劇場 (東京都千代田区)
対象者 (参加者数)	第二学年 (119人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	国立劇場 (独立行政法人 日本芸術文化振興会)
実施概要	<p>自国文化理解の取組の一環として、自国の伝統文化についての理解を深めるため、ある程度古文や歴史の学習が進んだ2年生を対象に文楽鑑賞会を企画した。 事前学習は「教養基礎国語Ⅱ」の時間に、本校元教諭萩原万紀子氏による、文楽に関する講義を行った。また、演目のあらすじを資料として配布した。このように基礎知識を身につけた上で鑑賞に臨んだ。</p> <p>内容 文楽鑑賞教室 解説 文楽の魅力 曾根崎心中(生玉社前の段、天満屋の段、天神森の段)</p> <p>費用 1,300円</p> <p>引率 2年担任 ほか</p>

アンケート集計結果

(回答数:104)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 興味・関心が向上した	49人	47%	46人	44%	9人	9%	0人	0%
3. 自国文化への理解が深まった	55人	53%	45人	43%	4人	4%	0人	0%
4. 次の機会にも期待している	54人	52%	41人	39%	9人	9%	0人	0%

アンケート結果及び分析

昨年度同様、今年度も「鑑賞教室」にしたため(一昨年度は、通常の文楽公演)、「内容が理解できた」に対して、「そうである」と答えた生徒が48%と非常に高かった(一昨年度は、21%、昨年度は46%)。また、「興味・関心が向上した」、「自国文化への理解が深まった」、「次の機会にも期待している」と答えた生徒の割合も半数近くあり、大変高かった(参考までに、昨年度は「興味・関心が向上した」に「そうである」と答えた生徒は31%、「次の機会にも期待している」と答えた生徒は31%であった。)。昨年度まで、3の質問項目に「進路の参考になった」という、他の講座等と同じ質問項目を実施していたが、性質上なじまないものがあり、今年度から「自国文化への理解が深まった」という項目に変更した。解説「文楽の魅力」では、人形の遣い方の説明を受けたり、実際に三味線に合わせて太夫の語りを体験する企画もあり、また、演目も近松の代表作でかつ生徒の興味が持てるものであったようで、概して生徒の満足度は高く、一定の成果を得ることができたと感じている。

SGH事業報告書

担当者: 今成 智美

事業名	自国文化理解教育(歌舞伎)
実施日時	2016年12月16日(金)10:30~14:00
場所	歌舞伎座 (東京都中央区銀座)
対象者 (参加者数)	第一学年 (118 人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	歌舞伎座 (株式会社 松竹)
実施概要	<p>教養教育(自国文化理解教育)の一環として、昨年度、一昨年度に引き続き、「歌舞伎鑑賞会」を実施した。</p> <p>1年生の段階から古典芸能に触れる機会を与えることで、グローバル人材の基礎となる教養を高めるとともに、日本の伝統文化に対する理解を深めることを目的としている。</p> <p>また今年度は「歌舞伎鑑賞会」に先立って、11月30日(水)の「教養基礎『国語』I」の時間に「歌舞伎鑑賞事前学習会」を設定し、地唄舞家元 扇崎秀園氏をお招きして、特別授業を実施した。</p> <p>以上のような基礎知識を身に付けた上で、歌舞伎座にて行われている「十二月大歌舞伎」(第一部)に参加した。</p> <p>演目 新作歌舞伎「あらしのよるに」</p> <p>費用 2,700円</p> <p>引率 一年担任 ほか</p>

アンケート集計結果

(回答数: 113)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1. 内容が理解できた	83 人	73.5%	29 人	25.6%	1 人	0.9%	0 人	0%
2. 興味・関心が向上した	79 人	69.9%	33 人	29.2%	1 人	0.9%	0 人	0%
3. 自国文化への理解が深まった	63 人	55.8%	46 人	40.7%	3 人	2.6%	1 人	0.9%
4. 次の機会にも期待している	87 人	77.0%	25 人	22.1%	1 人	0.9%	0 人	0%

アンケート結果及び分析

今年度の「歌舞伎鑑賞会」では、演目が新作歌舞伎で伝統芸能と現代的ストーリーが融合した内容であったこともあり、「1. 内容が理解できた」に対して「そうである」と回答した生徒は全体の73.5%、「2. 興味・関心が向上した」に対して「そうである」と回答した生徒は69.9%と、例年と比較しても非常に高かった。

また、今年度からアンケート項目に採用した「3. 自国文化への理解が深まった」に対しても、「そうである」と回答した生徒は55.8%と半数を超え、「どちらかといえばそうである」と回答した40.7%と合わせると96.5%にもおよび、本事業の主たる目的を達成することができたと考える。この背景としては、今年度11月に実施した「歌舞伎鑑賞事前学習会」において、連携する歌舞伎座((株)松竹)より「地唄舞家元 扇崎秀園氏」をお招きし、直接歌舞伎の歴史や歌舞伎座の舞台装置、役者の方々の所作から舞台裏に至るまで実演も交えながら伺うことができたことも、大きく影響していると考えられる。

全体を通して、「4. 次の機会にも期待している」に対して「そうである」と回答した生徒が77.0%にも及んでいることや、事後の感想にて多く見られた「また鑑賞したい」、「次回は古典歌舞伎にも挑戦したい」という意見からも、本事業にて、生徒の自国文化に対する興味関心を高めることができたと考えられる。これをきっかけに、各授業等の中においても、グローバル人材の基礎となる教養教育および自国文化理解教育をさらに進めていきたい。

SGH事業報告書

担当者: 木村 政子

事業名	お茶の水女子大学 英語によるサマープログラム
実施日時	2016年 7月18日(月) ~ 7月26日(火)
場所	お茶の水女子大学
対象者 (参加者数)	1~3学年 (35人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	お茶の水女子大学 グローバル人材育成推進センター
実施概要	<p>お茶の水女子大学が大学院生・学部生および海外協定校の留学生向けに企画しているサマープログラムに、「異文化体験や実践的な英語使用場面の機会の確保、およびコミュニケーション能力の強化と異文化への理解の増進」をねらいとしたSGHおよび高大連携の取り組みの1つとして、附属高校生が参加した。 (高校生は大学構内で行われるプログラムには原則どれでも参加できる。但し、高校の授業と重ならない講座のみ。)</p> <p>以下は高校生が参加したプログラムの講座名、および()内は参加者数である。</p> <p>①生殖医療とジェンダー(1) ②栄養学を超えて: 国際的交換と台所文化(6) ③動物のボディプランにおける軸と対称性(1) ④日本食文化入門と風味ワークショップ(10) ⑤イスラムの食と文化(2) ⑥自然科学における女性のキャリア(ドイツ・ブツパータル大学教員によるジェンダー関連ワークショップ)(1) ⑦ドイツ・ブツパータル大学教員によるジェンダー関連のオープン講義 Special Lecture "Gender"と、着付教室(Enjoy Japanese Kimono!)(1) ⑧映画セッション(日本映画鑑賞とディスカッション): "Sugihara Chiune"(1) ⑨食文化ワークショップ: Enjoy Japanese Food!(12) [A] 異文化交流セッション: 食文化プレゼン(高校生による米食文化、中学生によるポスターセッション、留学生による母国の食文化) [B]調理実習(おにぎり&みそ汁) [C]テイastingセミナー(日本茶&喫茶文化) ※⑨[A]の高校生による米食文化プレゼンは、3名1班で3班が発表を行った。</p>

アンケート集計結果

(回答数: 35)

1. 内容の理解度	かなり理解できた		まあまあ理解できた		半分程度理解できた		あまり理解できなかった	
	13人	37%	19人	54%	2人	6%	1人	3%
2. 講座内容	予想通り		予想とは違っていた					
	28人	80%	7人	20%				

アンケート結果及び分析

大学生向けのプログラムの割には、内容の理解度が比較的高く、アンケートの記述部分を見ても生徒の満足度、達成度は非常に高かった。

昨年と比較すると参加者数がかなり減っているが、その理由としては実施時期が昨年よりもかなり早くなったこと(昨年は8月)、高校の平常授業や夏休みに入ってしまうとすぐの都合宿等とぶつかったこと、一部の講座内容が高校生にはかなり難しかったこと、講座内容が直前になって急に変わったこと等があげられる。

アンケートからは、英語による発表や留学生を交えてのディスカッションを通して自らの英語力および各テーマにおける専門性をさらに高めていきたいと大いに前向きに感じていることが窺える。

SGH事業報告書

担当者: 阿部 真由美

事業名	スペシャルタナーレクチャー
実施日時	2016年5月18日(水)13:00~15:00
場所	お茶の水女子大学 講堂
対象者 (参加者数)	第二、三学年 (240人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	主催:タナー財団/お茶の水女子大学 運営:グローバルリーダーシップ研究所
実施概要	<p>テーマ「21世紀の女性の生き方」</p> <p>本学講堂にて、ケンブリッジ大学ニューナム・カレッジ学長のキャロル・ブラック氏による受賞講演、お茶の水女子大学名誉博士・元文部科学省大臣の遠山敦子氏によるスペシャルゲスト講演が行われ、高校2、3年生が参加した。</p> <p>キャロル・ブラック氏の講演では、ジェンダー平等をテーマに、イギリスを始めとした世界各国での現状について統計的な数値をあげながら紹介された。また女性がリスクをとる選択をしないことについて、その背景をさぐり、男女共同参画に関する課題をなげかけ、女性も失敗をおそれず自分自身を高めるために行動してよいし、それができるように社会を変えていくべきであると訴えた。</p> <p>遠山敦子氏の講演では、仕事を通じて様々な課題に挑戦し協働して解決していくという経験が社会貢献、人としての成長につながっていくことを、ご自身のご経験を交えながら話された。</p> <p>※ タナー・レクチャーは、アメリカの学者かつ実業家であり、博愛主義者でもあったオバート・クラーク・タナー氏によって設立された、「Human Value」に関連した学術的かつ科学的取組を推進し、かつ回想するための講義。これまでハーバード大学やスタンフォード大学などの米国の大学、さらに英国のオックスフォード大学およびケンブリッジ大学といった世界を代表する大学でのみ開催されてきた啓発活動で、今回のレクチャーは日本でははじめての開催。</p>

アンケート集計結果

(回答数: 229)

1. キャロル・ブラック氏の講演を英語でどのくらい理解できましたか。	5 とてもそうである		4 かなりそうである		3 どちらともいえない		2 あまりそうでない		1 全くそうでない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. キャロル・ブラック氏の講演を聞く際に、イヤホンによる同時通訳を利用しましたか。	57人	24.90%	78人	34.10%	45人	19.70%	21人	9.20%	28人	12.20%
3. キャロル・ブラック氏の講演内容は、あなたにとってどのくらい有意義なものでしたか。	14人	6.10%	118人	51.50%	84人	36.70%	11人	4.80%	2人	0.90%
4. 遠山敦子氏の講演内容は、あなたにとってどのくらい有意義なものでしたか。	10人	4.40%	121人	52.80%	84人	36.70%	9人	3.90%	5人	2.20%
5. 今回のレクチャーはあなたの今後の進路にどのくらい影響をあたえましたか。	4人	1.80%	45人	19.90%	96人	42.50%	62人	27.40%	19人	8.40%

アンケート結果及び分析

当日は、英語および日本語による同時通訳での講演となり、キャロル・ブラック氏の講演を英語で聞こうとチャレンジする生徒も多かったが、専門用語も多く内容もレベルが高く、イヤホンをつけながら英語と日本語を平行して聴いている姿が見られた。女性として社会でどのように活躍していけるのかを考える貴重な機会となった。ご講演についての生徒の感想を次にいくつか挙げる。「日本よりイギリスのほうが女性の社会進出に関して意識や意欲が高いにも関わらず更なる改善を求めている日本との意識の差が印象的だった。」「ジェンダーギャップはその人自身の意識を変えることで克服できるかもしれないということが印象に残った。」「お二方も社会で活躍されてきた方々で説得力があった。もっと女性が活躍するためには自信をつけることが大切で、リスクを考えながらも様々なことに挑戦することが必要だと思った。」

SGH事業報告書

担当者: 阿部 真由美

事業名	「ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」
実施日時	2016年9月7日(水)13:30~16:30
場所	東京大学安田講堂
対象者 (参加者数)	第二学年 (115人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	読売新聞社主催 外務省・文部科学省・NHK後援
実施概要	<p>スケジュール 13:30 主催者挨拶 13:35 基調講演 山中伸弥 先生 14:20 基調講演 江崎玲於奈 先生 15:20 パネルディスカッション 質疑</p> <p>フォーラムでは、江崎玲於奈先生(ノーベル物理学賞)、山中伸弥先生(ノーベル生理学・医学賞)から大変貴重なお話を伺った。 山中先生のお話では、ご自身が研究医を目指すことになった経緯とこれまでの研究を振り返りながら、iPS細胞誕生にいたるまでに世界でES細胞誕生や体細胞クローン技術などの研究が進んできた経緯や、iPS細胞の樹立によって期待される再生医療の展望と倫理的課題について分かりやすくお話いただいた。また、江崎先生のお話では、先生の幼少期からエサキダイオード発見、アメリカでの研究、帰国後現在にいたるまで日本での教育に貢献されていること等を振り返りながら、研究は、未踏の分野を探究することに意味があり、新しい発見や発明がなされるが、サイエンスに関しては論理的整合性の延長上に存在するものであり、それまでの積み重ねがなくてはならないものであることを強調された。 最後の質疑応答の時間には、探究Ⅰ「生命と医療」の講座の生徒が、臓器移植と再生医療の関係について質問する機会も得ることができた。</p>

アンケート集計結果

(回答数: 115)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 興味・関心が向上した	65人	56.50%	46人	40.00%	3人	2.60%	1人	0.90%
3. 進路の参考になった	33人	28.70%	55人	47.80%	19人	16.50%	8人	7.00%
4. 次の機会にも期待している	62人	53.90%	48人	41.70%	4人	3.50%	1人	0.90%

アンケート結果及び分析

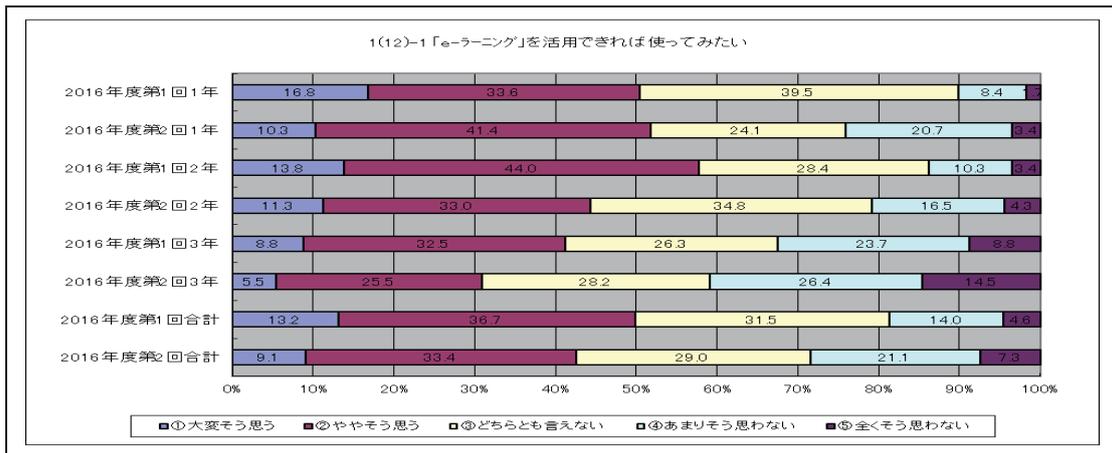
生徒の事後アンケートからは、お二人のノーベル賞受賞者のお話を受けて、研究成果の裏には基礎の学習が大切なのだということがわかった、という感想が多く寄せられた。またお話の内容に関して、探究Ⅰにおいて「iPS細胞」をテーマに探究を行っている生徒からは、「とても貴重なお話が聴けた。もっとiPS細胞について調べたい」という感想が返ってきている。また、グローバルにご活躍されたお二人が、「英語力」や「プレゼンテーション力」の重要性を強調されていっしょに、生徒は教科の学習やSGHとしての取組などの高校時代に学んだことの多くが将来につながるのだと実感できたようである。

SGH事業報告書

当者: 中津川 義浩

事業名	e-learning システムの活用		
実施日時	随時		
場所	お茶の水女子大学		
対象者 (参加者数)	第1学年 (117 人)		
連絡先 (企業名・担当者など)	外国語教育センター(ランゲージ・スタディ・commons)		
実施概要	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>大学の e-learning システムを活用できるように、第1学年の生徒全員にIDを付与し、随時システムを利用できるようにした。特に、第1学年1学期の教養基礎「英語」I の授業でクラスごとに大学の施設のランゲージ・スタディ・commonsで実習を行った。システムにログインし、各自でプログラムを利用して練習した。学外、自宅で利用できるプログラムもあり、その後夏季休暇中に2回以上の実習を課題とし、レポートを提出させた。</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>グローバル女性リーダー育成</p> <p>外国語自律学習システムの導入 E-Learning Plaza</p> <p>国際発達の強化を目的とした実践的外語運用能力の育成、情報社会における国際コミュニケーション能力の強化、留学等の海外派遣を促進させるための学内自律学習システム</p> <p>効果</p> <ul style="list-style-type: none"> 自律的な学習意欲の芽を伸ばす(専用の自習室) 学習の動機づけを高める(習熟度の自己分析) 発信力の強化(スピーキング/ライティング教材) <p>グローバル社会で必要とされる外国語の発信能力が、自律的な学習姿勢、情報リテラシーと併せ、より一層効果的に育成されることが期待できる。</p> <p>自習室 開室時間 9:00~19:00</p> <p>図書室 ランゲージcommons 開室時間 8:45~21:00</p> <p>外国語教育センターの拡充</p> <p>グローバル教育センターの拡充</p> <p>多文化キャンパスの実現</p> <p>外国語教育プログラムの強化</p> </div> </div>		

アンケート集計結果(第2回SGH意識調査より)



アンケート結果及び分析

SGH意識調査第1回で、e-ラーニングをできれば使ってみてみたいとする者が、①「大変そう思う」が20名16.8%、②「ややそう思う」とする者が40名33.6%いたのに対し、第2回では①が12名10.3%、②が48名41.4%。①と②を合わせた人数には変化がない。一方、③「どちらとも言えない」が第1回で47名39.5%、第2回で28名24.1%、④「あまりそう思わない」が第1回10名8.4%、第2回24名20.7%であった。第2回調査で④が増加したことは残念であるが、実習をしないまま漫然とした期待や希望を抱き続けるのではなく、体験したうえで多くの生徒が実感をとまなう感想を持ったことをよしとした。

生徒のコメント:「ハイテクで、これからの英語学習においてやってみたい課題がたくさんあった。ゲーム感覚で英語に触れられるのがよいと思った。」「自分の英語の質を上げることができ教材がたくさんあるので、うまく活用して生活に使える英語を身につけていくことを目指していきたいです。」「私は将来国際的な仕事に就きたいので、フランス語や中国語を勉強したいと考えている。だから自主的にフランス語を勉強してみたい。」

4. 連携・評価・発信グループの取組

4.1. 取組の概要

連携・評価・発信グループは、SGH 事業における研究開発全般の総合調整を担う研究部に所属する教員が兼務し、研究部と各グループの主担当とで構成される拡大研究部会において取組の進捗状況や課題等を把握し、各取組の連携を促したほか、事業の推進に当たり本校が指導・助言・協力等を得ている管理機関や他大学、文部科学省等の関係機関との連携強化、他の SGH 指定校等との交流促進、本校生徒の意識やグローバル・リーダーとしての資質・能力を把握するための調査等の実施、同調査の結果や管理機関等からの助言なども踏まえた教育評価のあり方の検討、SGH 成果発表会兼公開教育研究会やホームページ、パンフレット等を活用した事業成果の普及などを進めた。

○研究部と連動した本校における研究開発全般の総合調整

校内の各グループ・教員単位で進める個々の取組の進捗状況や課題等を把握し、研究部会や教員会議等において、主に、校内外との連携や教育評価、取組成果の普及の観点から報告・提案を行い、校内及び管理機関との情報・課題意識の共有を図りつつ研究開発を推進した。

平成 28 年 8 月に全教員を対象に実施した校内研修会では、指定 3 年目の中間評価に向けて作成した資料をもとに、本校の SGH 事業の成果と課題を確認し、各課題研究の授業担当者から今年度の進捗を報告する機会を持った。その上で、学校運営を司る企画委員会が中心となって、今後の課題探究型学習の進め方や教育評価のあり方だけでなく、SGH 指定終了後に、SGH 事業で得られた成果をどのように本校の教育内容に生かしていくのかについても全教員で協議する機会を設け、協議を重ねた(今年度は 11 月と 2 月の実施)。協議においては、全ての教員から事業に対する率直な意見を聴取するとともに、グループディスカッションにより具体的な提言をまとめ発表する機会を設定した。これにより、研究開発及び事業運営について様々な観点から課題を発見・整理することができ、今後の取組の方向性について、各教員間の共通理解を図ることができた。

○管理機関との連携強化

昨年度正式に設置した、管理機関であるお茶の水女子大学の教員 8 名から構成される「アドバイザーボード」を活用し、お茶の水女子大学からの支援体制強化を図った。管理機関からは、SGH 事業の研究開発及び運営のあり方も含め、本校の教育研究及び学校運営全般に対する指導・助言を得るほか、課題探究型学習の推進に資する大学の教職員や研究者、学生(外国人留学生を含む)の本校授業・課外活動への派遣、生徒の外国語・コミュニケーション能力の向上や国際交流・異文化体験・理解の機会拡充に資する大学主催の企画・イベント等への本校生徒及び教員の招致、大学の e-learning システム等の本校生徒への使用開放など、多岐に渡って協力を得た。

○高大連携の促進等に向けた東京工業大学との連携強化

本校は、お茶の水女子大学のほか、平成 24 年度より東京工業大学とも高大連携教育を実施しており、理工系に優れた生徒の育成に向けた高大連携教育システムの構築を目指し、研究開発を進めている。本年は、東京工業大学グローバル人材育成推進支援事業の一環である科

学教育を通じた日本・タイの国際交流プログラムへの協力依頼を受け、8月に本校教員が日本における科学教育の現状と課題について概要説明・話題提供を行った。12月には本校に東京工業大学、タイ・チュラーロンコーン大学の学生及び関係者が来校し、本校の生徒23名とタイ・Mater Dei Schoolの生徒が「科学教育とICT」をテーマとする課題解決型学習に、ネット回線接続を用いて共同で取り組んだ。実験を通じた物理・電磁気分野の理解及び、タイと日本、高校生と大学生の交流を深めることができた。

○生徒の意識・能力等に関する調査の実施 ※分析結果は4.2節参照

平成28年4月及び平成29年1月、本校の全ての生徒を対象に、SGHの取組も含めた本校の教育方針・内容・方法や、高等学校での学習を通して伸ばしたい資質・能力、自らの進路、その他学校行事・特別活動も含めた学校生活全般に関する意識調査を実施した。特に、第2回目の調査では、第1回目調査の結果との比較分析、過去2年分の調査結果との比較分析も行い、本校生徒の実態・特性等を把握した。さらに、調査結果及びその分析を踏まえた今後の教育研究の方向性について、職員会議等において報告・提言し、各グループでの検討や各教員の授業等の改善の参考とするよう促した。また、平成28年12月から平成29年1月にかけて、保護者を対象に本校のSGH事業に対するアンケート調査を実施し、その結果についても校内で共有した。

さらに、本年度は、株式会社ベネッセコーポレーションが開発した「GPS (Global Proficiency Skills)-Academic」(以下「GPS」という。)を1,2学年の生徒全員を対象に12月に実施した。GPSは、選択・記述式問題、論述式問題及びアンケートを通して、グローバル社会で起こり得る課題等について与えられた資料から適切な情報を読み取り、他者とも協働しながら課題の発見・解決を図る力や、グローバル・リーダーに必要な姿勢・意欲・態度などを3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)に分けて測定するものである。全員履修で取り組んだ「持続可能な社会の探究Ⅰ」の成果として、特に「批判的な思考力」に伸長が見られた。

生徒がある程度客観的な指標に基づいて自分自身の能力や適性を把握し、今後の学習に役立てるとともに、教員も本校生徒の特性を把握した上で指導の改善を図ることができるよう、来年度もGPSを年1回、1・2年次の生徒を対象に実施する方向で検討している。

○OSGHとしての授業や特別活動に係る教育評価のあり方の検討

本年度より、「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び「持続可能な社会の探究Ⅱ」において、ルーブリックを用いた教育評価の研究・試行に取り組んできたが、これを基に、管理機関(特に、アドバイザリーボード)や本校SGH運営指導委員会等からの助言も得つつ、評価項目・方法等の見直しに向けた検討を行った。

○他のSGH指定校との交流、事業や生徒の課題探究の過程及び成果の普及

平成28年10月に開催された「全国国立大学附属学校連盟(全附連)大会高等学校部会教育研究大会」において、SGHやSSH等に指定されている他の国立大学附属高等学校及び中等教育学校の管理職・研究主任等とともに、各校のSGH事業の現状や課題等について情報交換及び協議を行い、本校の事業の推進や改善の参考とした。同12月に開催された「スーパーグローバルハイスクール(SGH)第1回全国フォーラム」へは5名の教員を派遣、「平成

27年度第2回スーパーグローバルハイスクール(SGH)連絡会及び連絡協議会」に際しては、本校教諭がパネリストとして登壇し、本校生徒の様子をふまえ討論を行った。また、他のSGH指定校が主催する生徒の成果発表会への本校生徒の派遣なども実施した。

本校のSGHとしての取組を周知するために昨年度作成・配布したパンフレットの内容を見直し、「持続可能な社会の探究Ⅰ」の各領域及び各講座で取り組むテーマについてわかりやすく掲載した。事業の成果報告書や生徒論文集とともに、受験生及びその保護者を対象とした学校説明会や成果発表会、全附属高等学校部会教育研究大会で配布するなどして広く周知した。また、本校のホームページの中に開設したSGH専用ページにおいて、本校の具体的な取組内容について計34件(平成29年2月1日現在)の報告を行った。

今年度は、多くの教育関係者から本校のSGH事業の取組について助言をいただけるよう、SGH成果発表会兼第21回公開教育研究会を平成29年3月18日に開催予定である(第2回運営指導委員会と同日開催)。昨年同様、2年必修「持続可能な社会の探究Ⅰ」の各講座で個人またはグループで作成した論文について生徒がプレゼンテーションを行うほか、今年度はこれまでの管理機関や運営指導委員会からの指摘及び校内での議論も踏まえ、各講座ごとに1,2年生がグループワークをする時間を設けた。次年度から本格的に課題研究に取り組む1年生と、1年間探究活動を経験してきた2年生がグループワークを行う形をとることで、2年生の助言により1年生がより明確な課題を設定しスムーズに探究活動に取り組めるようにした。その後の研究協議にて、成果発表会での生徒の活動の様子を踏まえ、本校のSGH事業の成果と課題について運営指導委員会だけでなく参加者から広くご意見をいただく予定である。

4.2. 生徒の意識調査(質問紙調査)の結果及び分析

4.2.1 調査概要

4月末及び1月上旬の年2回、全生徒に対してSGHの取組や進路、本校のカリキュラムの特徴などに対する生徒の意識、関心、の変化や身に付けさせたい能力や資質に関する自己評価を質問紙による5件法で調査した。(結果詳細については、「関係資料4」を参照。)以下は、主だった調査結果及びその分析である。(特に記載のない場合、回答率は本年度第2回調査の結果を引用し、「大変そう思う」と「やや思う」を合算した割合を表す。)

4.2.2 意識調査全体の概観

1) SGHの取組全体に対する好意的な評価

70%を超える生徒がSGHの取組を「面白そうである」、また、95%を超える生徒が「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」と回答している。SGHの様々なプログラムやその中核である課題探究型の学習への関心の高さとそうした学習自体への価値を見いだしていることがうかがえる。

2) 身に付けたい、伸ばしたい能力や資質の上位は、「プレゼン」「英語活用」「教養」

本校SGH研究の目指す様々な基礎的・汎用的能力のうち、「プレゼンテーション能力」を「身に付けたい」と回答した生徒は60%である。また、「英語を活用する力」や「幅広い教養」もそれぞれ5割を超える数値になっている。また、「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」と回答した生徒は90%を超えており、英語を活用した探究成果の発信に強い関心を抱いている。プレゼン能力や英語の能力を発揮する場面を計画的に設定したり、外部の発表機

会を紹介したりする機会を積極的に提供していきたい。

また、課題探究型の学習のあらゆる場面で欠かせない「論理的思考力」についても、生徒は「将来の役に立つ」(95%)、「高めたい」(96.2%)と考えており、各教科・領域を横断し、論理的思考力を高める活動や教材の開発・改善に努めていくことで、生徒のニーズに応じたカリキュラムの展開と能力の向上を図ることができると考える。教科の学習で培った技能を活用し、探究活動の成果をレポートや論文の形でまとめられるような指導・支援を工夫していきたい。

4.2.3 前回調査との比較より（2・3年生に顕著な特徴がみられる汎用的能力）

※（ ）内は第1回→第2回の「大変+ややそう思う」、または「だいたい+できることもある」の回答率を表す。

・必要に応じて他者と協力して活動を進められる。(3年生:79.8→85.4%)

・目的やメディアや機器の特徴に応じ、それらを適切に選択し使用できる。

(3年生:63.8→72.7%)

・そのトピックについて知っていればまとまりのある英文を書ける。(3年生:46.8→65.8%)

・相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる。

(2年生「だいたいできる」:13.7→24.1%, 3年生「だいたいできる」:20.4→28.2%)

・議論や考察を繰り返しても課題や主張を見失わずに把握できる。

(2年生「だいたいできる」:16.2→25.9%, 3年生「だいたいできる」:19.8→32.1%)

・事実であれば、客観的なものであるかを意識してより確かな推論や根拠を立てることができる。(2年生:69.2→85.3%)

・主張を根拠の間に飛躍や誤りがないか、不整合な部分はないかを確認できる。

(2年生:65→75.8%)

本調査から、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」の探究活動と上記の結果に明確な因果関係を説明することはできないが、1年間探究活動を行うことが何らかの効果をもたらしているのではないかとと思われる。

また、「持続可能な社会の探究Ⅱ」では、2年次に取り組んだ「持続可能な社会の探究Ⅰ」や「グローバル総合」の異なる成果を3年生各クラスで共有し、新たに新聞作成用のグループを編成して活動を協働的に進めたことは、「他者と協力して活動できる」と回答した生徒が伸びた一因となったのではないだろうか。また、「目的やメディアや機器の特徴に応じ、それらを適切に選択し使用できる」や「そのトピックについて知っていればまとまりのある英文を書ける」と回答した生徒が増加したのも新聞記事としての客観性と信頼性が求められる中での1年間の取材・執筆・校正作業の成果と言えよう。

「持続可能な社会の探究Ⅰ」では、推論・根拠の立て方、また、主張と根拠の整合性など、1年間のグループによる探究活動の過程で、そうした力が培われてきているのではないだろうか。また、相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだり、議論や考察を繰り返しても課題や主張を見失わずに把握したりする力は探究活動の質を高めるうえで欠かせない学習過程であり、引き続き、本年度の取組を改善していきたい。

しかしその一方で、「自主的に探究課題を発見できる」という項目の伸び率が一桁にとどまっ

ており、課題把握や探究テーマの設定の段階での工夫や改善が求められるだろう。また、「現代社会の諸課題に関心を高められる」が2年生で、「現代社会の諸課題についてもっと学習したい」が2・3年生で数値を落としており、関心・意欲面の伸長も今後の課題として挙げられる。

4.2.4 過年度の調査との比較より

※()内は2015と2016年度の同回(第2回)の「大変+ややそう思う」、または「だいたい+できることもある」の回答率の比較を表す。(2015年度の割合/2016年度)

ここでは、SGHに指定されて入学し、さらにSGHカリキュラム変更により「持続可能な社会の探究Ⅰ」を学年全員履修にした2年生に顕著にみられる変化や、同じくカリキュラム変更により、「持続可能な社会の探究Ⅱ」を学年全員履修にして英字新聞作成プロジェクトに取り組んだ3年生に何らかの影響があると思われる項目をいくつか挙げておきたい。もちろん、本調査の結果のみをもって因果関係を説明することにはならないが、来年度以降の取組、新たに始めた取組の質の向上のためにも生徒の実態を引き続き追っていく必要がある。

1) 「総合的な学習の時間」を通し、現代社会の諸課題に関心を高められると考える3年生の増加 (78.1/88.3%)

SGHカリキュラムの変更はあったが、2・3年と「総合的な学習の時間」に全員履修で探究活動に取り組んできたことが、このような結果につながった一因だと考える。引き続き、探究活動の質の向上やより効果的な教師の支援を工夫していきたい。

2) 現代社会の諸課題について、もっと学習したいと考える3年生の増加 (80.5/86.4%)

3年時に全員履修の形で、「総合的な学習の時間」にそれまでの探究活動の成果を英字新聞の形でまとめる活動を行った。幅広く時事問題を取り上げるとともに、高校生の視点を意識した記事内容の作成を促したことが生徒の関心を高めることにつながったのではないかと考える。論理的な思考力を高めたいと考える生徒も増加している。また、3年生は、「自主的に課題を発見できる」、「必要に応じて他者と協力して活動を進められる」、「探究活動は将来の役に立つ」いずれの項目においても増加しており、SGHカリキュラム変更の効果が伺える。

3) そのトピックについて知っていれば、まとまりのある英文を書けると答えた3年生の増加

(45.6/65.8%)

「持続可能な社会の探究Ⅱ」において、3年生全員が英字新聞記事作成を行う中で、複数の生徒で1本の記事を書き上げ(collaborative writing)、異なるグループの記事について校正をし合い(peer editing)、The Japan Timesからの示唆やアドバイスを基に何度も記事を書き直した活動の成果であると考えられる。

4) 可能であれば大学生の時に留学したいと思う2年生の増加 (68.1/80.1%)

海外大学への進学を希望する生徒の割合は微減したものの、大学時に留学をしたい生徒が増えた。「持続可能な社会の探究Ⅰ」において、世界の様々な課題についてテーマを設定し探究活動や英語による情報収集・発信を行ったことが留学への関心を高める一因となったのだろう。

5) 課題の設定や根拠・推論の仕方、探究の方向性の検討や議論、論文や資料の客観性の読み取りに関する諸項目でできると答えた2年生の増加 (72.4/78.9%)

全員履修の「持続可能な社会の探究Ⅰ」において、生徒の興味・関心や教員の専門分野・強みを生かした領域・講座を設定し、グループで探究活動を1年間行ってきた大きな成果であ

ると考える。意図的な指導・支援の場を明確にするとともに、年間活動計画が生徒にとって過剰な負担にならないように配慮しながら、探究活動への意欲も高めていきたい。

また、軒並み数値が上がる中で、「相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり論文を読んだりすることができる」と答えた生徒が微減しており、論理的・批判的な思考力を高めるための意図的支援や言語活動の充実を図っていきたい。

6) 幅広い教養，文理選択をせずに学習を行えるカリキュラムが進路選択に有効だと考える生徒の減少（学校平均:77.6/66.5%）

本校の特徴・教育方針の1つである教養主義に対して生徒の理解が追いついていなかったりその有効性を実感できる機会を提供できていなかったりすることが原因かもしれない。個別の具体的な取組の目的の周知や取組自体を生徒の実態に応じて改善することが必要であると思われる。

4.2.5 GPS Academic テスト結果より

1・2年生は、本年度より GPS テスト(ベネッセ・コーポレーションによる汎用的能力を図るためのテスト。以下、GPS と呼ぶ。)を 12 月に受験した。社会で必要な3つの思考力を、「批判的思考力」、「協働的思考力」、「創造的思考力」とし、それぞれの思考力について記述式テストと自己評価によって図るものである。S～Dの5段階で評価される記述式テストの結果は以下のとおりである。

4.2.5-1 GPS 結果概要 ※括弧内は、(グレード S の人数/A の人数)を表す。

思考力	1年生平均グレード（112名）	2年生平均グレード（116名）
批判的思考力	トータル:A（0/60） ・情報を抽出し吟味する:A ・論理的に組み立てて表現する:C	トータル:A（0/79） ・情報を抽出し吟味する:S ・論理的に組み立てて表現する:B
協働的思考力	トータル:A（9/89） ・他者との共通点・違いを理解する:A ・社会に参画し人と関わり合う:B	トータル:A（13/77） ・他者との共通点・違いを理解する:A ・社会に参画し人と関わり合う:B
創造的思考力	トータル:A（7/74） ・情報を関連付ける:A ・問題を見出し解決策を生み出す:B	トータル:A（9/68） ・情報を関連付ける:A ・問題を見出し解決策を生み出す:B

批判的思考力の下位能力では、「情報を抽出し吟味する」力で2年生にグレード S が付いている。Sは、「資料の複雑さ・抽象度に関わらず、目的に応じてそこに含まれるすべての情報を抽出し、活用できる」レベルを、Aは、「複雑で抽象的な設定の資料から、目的に応じて必要な情報を抽出し、活用できる」レベルを表している。「持続可能な社会の探究 I」の探究活動の学習過程において、それらの力を学年全体で伸ばすことができた成果であると考えられる。論理的に組み立てて表現する力も、1年生が C「不明確だが何らかの主張がある」に対して、2年生が「納得感のある、効果的な主張・回答が提示できている」レベルである。教科の学習はもちろんのこと、「持続可能な社会の探究 I」におけるグループでの探究活動や、中間発表や対外的なコンテスト、発表会での経験が生かされていると考えられる。

GPS については、以下の利点があり、今後も SGH の取組の効果検証・評価の大きな柱となる

評価指標である。

<利点>

- ・記述式問題により、思考力を多面的に評価し、数値化することができる。
- ・探究活動の学習過程における自己評価が付随しており、自己評価の高さ・低さとテスト結果をクロス集計することができる。
- ・模擬試験とGPSの関係を見ることができる。
- ・教科指導における働きかけや支援の具体について参考例が掲載されている。

本年度は、各学年の進路担当が、資料を作成して結果返却時GPSの趣旨や思考力の捉え方について生徒に説明するなどした。来年度は、上記の利点を生かし、GPSの結果を探究活動の学習過程の改善や教師の個別支援の質の向上に役立てたい。また、結果返却と併せて事後指導の改善にも取り組みたい。

5. 次年度以降の課題及び改善点

中間評価をふまえ、これまでの取組の成果を維持しつつさらに発展させるため、次の点に重点をおき、今後の研究開発を進めていくこととしたい。

今年度より、新たな教育課程の下で2・3年次のすべての生徒を対象とした「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」を開講し、また、校内選考を経て参加者を決定する形式で2年次の海外研修を実施した。そうした変更をふまえ、「持続可能な社会の探究Ⅰ」に関しては、新規開講講座を含むすべての講座について、今年度実施した1年間の課題探究型の指導サイクルを見直し、質的向上を図ることが課題である。海外研修に関しては、今年度構築した授業外での指導サイクルを軸として、さらにフィールドワークとしての効果的な活動となるよう、「持続可能な社会の探究Ⅰ」との連携を図ることが課題である。

評価に関しては、前述の意識調査及びGPSテストの結果を研究効果測定の指標としながら、「総合的な学習の時間」を中心に各科目等の課題探究型学習において活用し得る、自己・相互評価の方法・様式について更なる工夫をすることが課題である。また、評価の結果の活用について、生徒にどのようにフィードバックを行うか、探究活動の見直しにどのように活用できるかを検討することが課題である。

関係資料1

目標設定シート項目の実績

(1-d) グローバルな社会またはビジネス課題に関する公共性の高い大会における入賞者数

1年生	私たちの身の回りの環境地図作品展(環境地図教育研究会)	努力賞(3名)
2年生	アジアユースリーダーズ(中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案を競うプログラム)	一位
2年生	アジアユースリーダーズ(中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案を競うプログラム)	二位
2年生	アジアユースリーダーズ(中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案を競うプログラム)	三位
2年生	中央大学第16回高校生地球環境論文賞	優秀賞
1年生	中央大学第16回高校生地球環境論文賞	佳作
2年生	中央大学第16回高校生地球環境論文賞	入選(9名)
2年生	国際理解・国際協力のための主張コンクール	東京都大会特賞・ 全国大学全国人権擁護委員 連合会会長賞
2年生	国際理解・国際協力のための主張コンクール	努力賞(2名)
1年生	第11回全国高校生金融経済クイズ選手権エコノミクス甲子園	東京大会優勝/全国大会7位 (2名)
3年生	All Japan Junior and Senior High School English Newspaper Contest	Foreign Media Prize(39 名)
1年生	金融と経済を考える高校生小論文コンクール	佳作(2名)
1年生	NRI(野村総合研究所)学生小論文コンテスト2016	奨励賞
1年生	拓殖大学 ORANGE CUP 2016	最優秀賞
1年生	Mono-Coto Innovation2016	部門2位(3名)
1年生	Mono-Coto Innovation2016	部門3位(4名)
2年生	第2回全国ユース環境活動発表会全国大会	優秀賞(4名)
2年生	第19回全国中学高校webコンテスト	金賞(13名)
2年生	第20回全国中学高校webコンテスト	トップ50(8名)
2年生	第17回日経S T O C Kリーグ	入選(17名)
2年生	平成28年度関西大学ライティングラボ主催「考動力」作文コンテスト	小論文部門 最優秀賞(1名)

(2-a) 課題研究に関する国外の研修参加者数

イオンアジアユースリーダーズ(タイ)	5名
台湾研修	30名

(2-b) 課題研究に関する国内の研修参加者数

2016ヤング天城会議(日本IBM株式会社)	1名
日経エデュケーションチャレンジ	13名
箱根ジオパーク防災研修	11名

(2-d) 課題研究に関して大学教員および学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)

お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 沼部博直氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 戸谷陽子氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 三浦徹氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 小風秀雅氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 准教授 長谷川直子氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 准教授 飯田薫子氏	1名×1回
お茶の水女子大学図書・情報課長 森いづみ氏	1名×1回
国立音楽大学副学長 久保田慶一氏	1人×1回
東京大学新領域創成科学研究科 教授 内丸薫氏	1名×1回
東京大学社会科学研究所 教授 宇野重規氏	1名×1回
東京農工大学工学研究院応用化学部門 教授 銭衛華氏	1名×1回
法政大学デザイン工学部システムデザイン学科 教授 安積伸氏	1名×1回
東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室 助教 中島伸氏	1名×1回
お茶の水女子大学留学生(中国・ロシア・ハンガリー)	3名×1回
立教大学学生 八重樫郁哉氏	1名×1回

(2-e) 課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)

文化庁長官官房国際文化交流室企画係長 小林宏氏	1名×1回
独立行政法人国際協力機構 (JICA) 国際協力専門 (保健) 萩原明子氏	1名×1回
公益財団法人ジョイセフ 柴千里氏	1名×1回
公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン事務局	1名×1回
認定 NPO法人 JUON (樹恩) NETWORK 理事長 鹿住貴之氏	1名×1回
日本IBM 塚本亜紀氏 榎美紀氏	2名×1回
国立国際医療研究センター国際医療協力局 土井正彦氏	1名×1回
国立国際医療研究センター感染症対策専門職 堀成美氏	1名×1回
国立国際医療研究センター産婦人科医 定月みゆき氏	1名×1回
日本マイクロソフト エヴァンジェリスト 渡辺弘之氏	1名×4回
Make School CEO Jeremy Rossmann氏	1名×1回
CURIO SCHOOL 代表取締役 西山恵太氏	1名×1回
株式会社メルティンMMI 執行役員(COO) 粕谷昌宏氏	1名×1回
株式会社リバネス 前川昇平氏	1名×1回
ソニー株式会社 赤羽進亮氏	1名×3回
ソニー株式会社 有松和之氏	1名×3回
株式会社FirstMake 代表取締役 内山恵梨香氏	1名×1回
本田技研工業株式会社 奥井美帆子氏	1名×1回
本田技研工業株式会社 長内由佳氏	1名×1回
現代音楽研究家 辻浩美氏	1名×1回

(2-f) グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数

第10回全日本高校模擬国連大会	2名
第17回日経STOCKリーグ	21名
キャリア甲子園2016	4名
日本地理学会2016秋季学術大会 高校生の部 ポスター発表	1名
日本地理学会2017春季学術大会 高校生の部 ポスター発表	1名
第19回全国中学高校webコンテスト	21名
第2回全国ユース環境活動発表大会	4名
拓殖大学ORANGE CUP 2016	1名
Mono-Coto Innovation2016	7名
All Japan Junior and Senior High School English Newspaper Contest	117名

関係資料 2

【第1回 SGH 運営指導委員会】

1 日時 2016年6月22日(火) 13:00~17:00

(13:00~14:50 高校にて「持続可能な社会の探究 I」の授業参観)

2 場所 お茶の水女子大学 第一会議室

3 出席者

・運営指導委員 黒河内久美 (公財)国連大学協力会・評議員

永井 裕久 筑波大学大学院ビジネスサイエンス系教授

根津 朋実 筑波大学大学院人間系准教授

・管理機関(お茶の水女子大学)

真島 秀行 副学長 学校教育支援・社会連携担当 教授

耳塚 寛明 基幹研究院 人間科学系 教授

清水 徹郎 基幹研究院 人文科学系 准教授

富士原紀絵 基幹研究院 人間科学系 准教授

(陪席 田村 恵美 お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 特任アソシエイトフェロー)

・校内出席者 村田容常 校長・基幹研究院 自然科学系 教授

菊池美千世 副校長

連携・評価・発信グループ 阿部真由美(研究部長), 津久井貴之, 北原武, 今成智美

課題研究グループ 朝倉彬, 増田かやの, 葎内ありさ, 沼畑早苗, 佐藤健太, 外川陽菜,

松野翔太, 三橋一行, 吉村雅利, 原大介, 畠山俊, 溝口恵, 玉谷直子, 土方伸子

教養教育グループ 植田敦子, 木村政子, 中津川義浩, (全教員)

4 会議次第

(1)校長より開会あいさつ (2)管理機関の取り組みについて (3)高校の取組について

(4)運営指導委員より (5)協議

5 運営指導委員より頂いたご意見

・多くの生徒が PPT を使用していることがよい。発表には、ばらつきがある。聴衆に向けてプレゼンを行えている生徒はまだ少ない。プレゼンの大切さ、相手を説得するような姿勢が必要。

・まだ6月ということで割り引いて見る必要があるが、研究課題が単なる問題提起で終わっている。

・FW を行っていること、グループワークを取り入れていること、ツールの提供の仕方(探索準備ノート, 評価表などを ICT ツールに応用)がよい。

・リーダーに必要なリテラシーとして①意思決定する②コミュニケーションをとる③人を動かす, の3つが主に挙げられるが学校では①②は育成可能。探究的な課題、リサーチメソッドを共通に学ぶ時間を持ってもよいのではないか。

・日本人は、セルフコンフィデンス, 対人コミュニケーション, プレゼンが低い。一方でコンピテンシーを性別で比べると, 国際的データでも女性が優位。グローバルマインドセットについて, 知識・心理・対人社会的なもの3つで比較すると, 社会人は知識が高いが, 高校生と社会人の心理的な要素は驚くほど差が無い。つまり高校時点である程度固まってしまうということ。グローバルな意識は高校から大学の間に伸びる。女性かつ高校生であることは, グローバルリーダーを育成するのに最適である。

・探究テーマについては、知識が加わるとテーマが変わってくるので、テーマが移り変わっていく過程で上級生をどう使えるか考えるとよいのではないか。マッチングのところで去年経験している先輩を活用できるか。

・新規講座について、生徒は担当教員の教科・科目を意識してしまうので、違うテーマが入り込んでくることが生徒にわかると、選択する生徒側の意識が違ってくるのではないか。

・他校とのやりとり、視察はどう生かされているのか。他校との差異化はどう図るのか。

【第2回 SGH 運営指導委員会】 (※実施予定)

1 日時 2017年3月18日(土) 10:00~17:00

(10:00~15:30 「SGH 成果発表会兼公開教育研究会」を参観)

2 場所 お茶の水女子大学附属高校 社会科室

3 出席者

- ・運営指導委員 黒河内久美 (公財)国連大学協力会・評議員
内海 成治 京都女子大学発達教育学部 教授
楠見 孝 京都大学 大学院教育学研究科教授
永井 裕久 筑波大学大学院ビジネスサイエンス系教授
根津 朋実 筑波大学大学院人間系准教授
田村 知子 岐阜大学大学院教育学研究科 准教授

・管理機関(お茶の水女子大学)

- 真島 秀行 副学長 学校教育支援・社会連携担当 教授
耳塚 寛明 基幹研究院 人間科学系 教授
清水 徹郎 基幹研究院 人文科学系 准教授
富士原紀絵 基幹研究院 人間科学系 准教授

(陪席 田村 恵美 お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 特任アソシエイトフェロー)

・校内出席者 村田容常 校長・基幹研究院 自然科学系 教授

菊池美千世 副校長

連携・評価・発信グループ 阿部真由美(研究部長), 津久井貴之, 北原武, 今成智美

課題研究グループ 朝倉彬, 増田かやの, 葭内ありさ, 沼畑早苗, 佐藤健太, 外川陽菜,

松野翔太, 三橋一行, 吉村雅利, 原大介, 畠山俊, 溝口恵, 玉谷直子, 土方伸子

教養教育グループ 植田敦子, 木村政子, 中津川義浩, (全教員)

4 会議次第

(1)校長より開会あいさつ (2)管理機関の取り組みについて (3)高校の取り組みについて

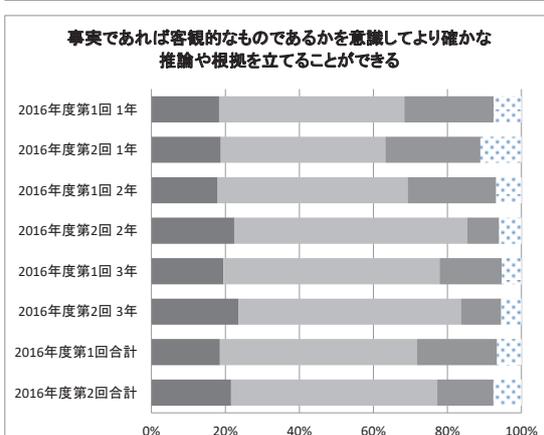
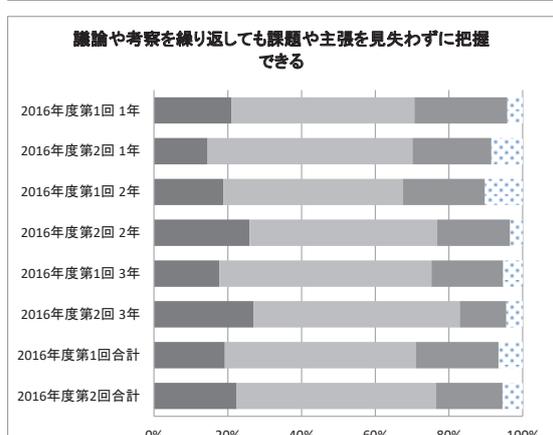
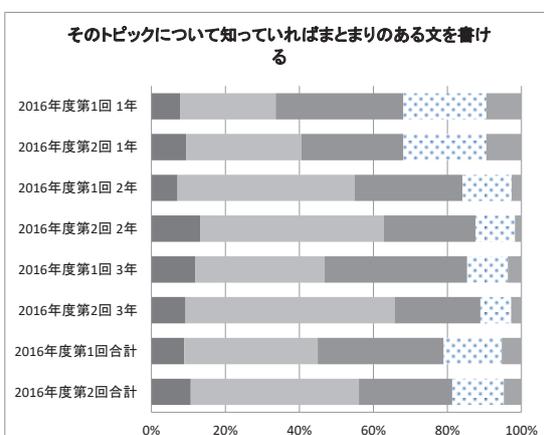
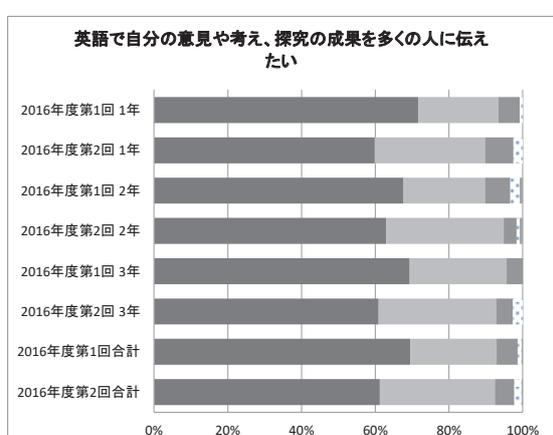
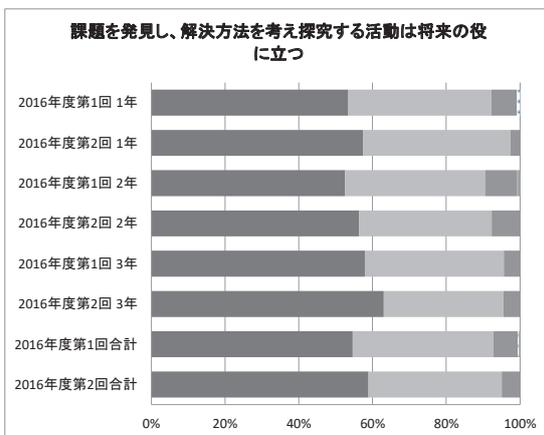
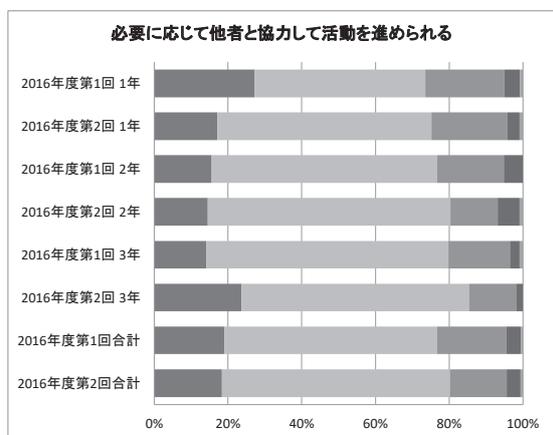
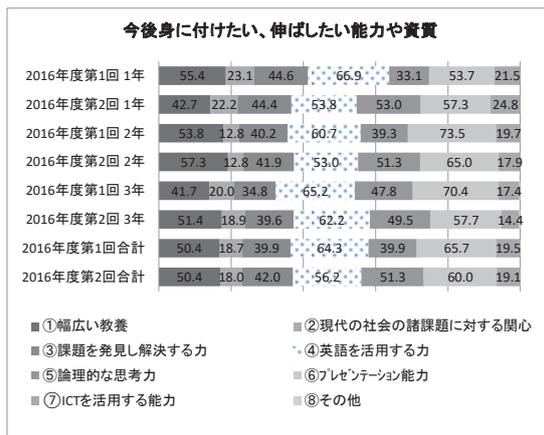
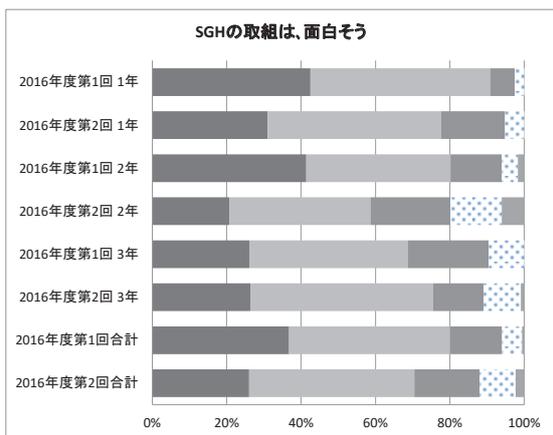
(4)運営指導委員より (5)協議

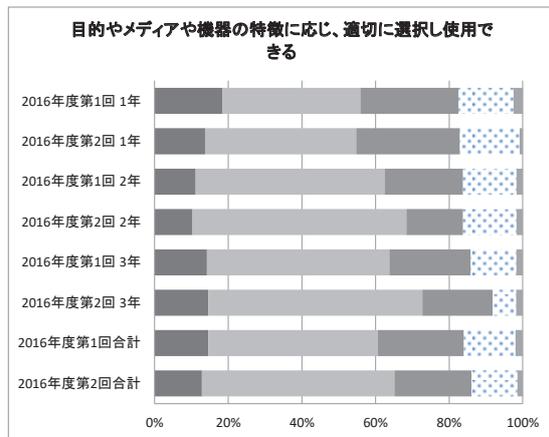
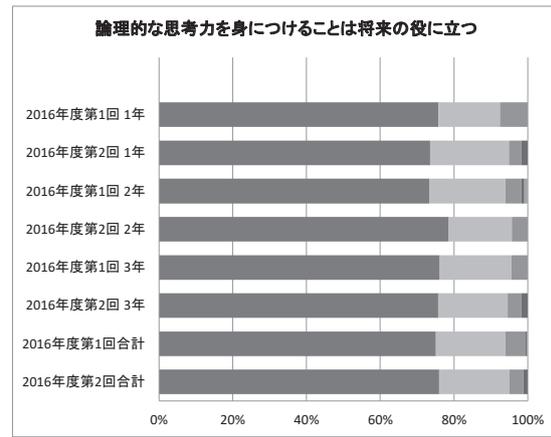
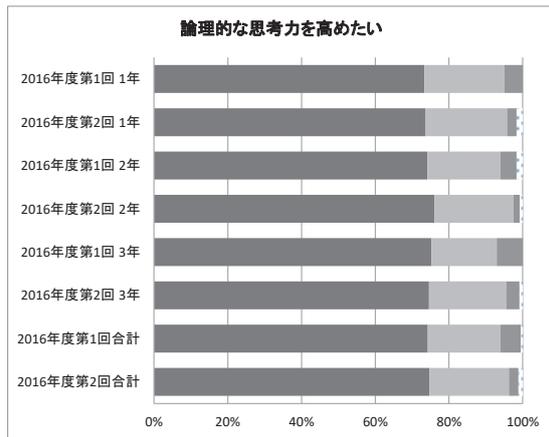
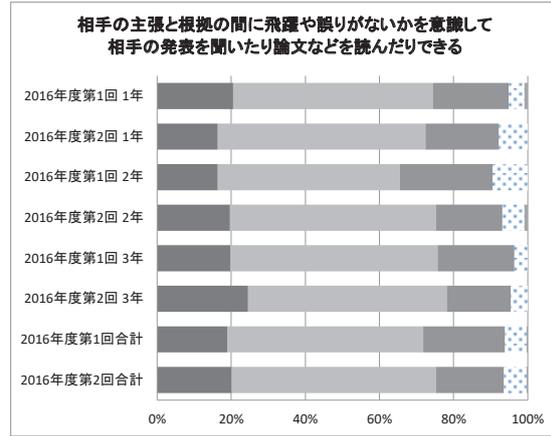
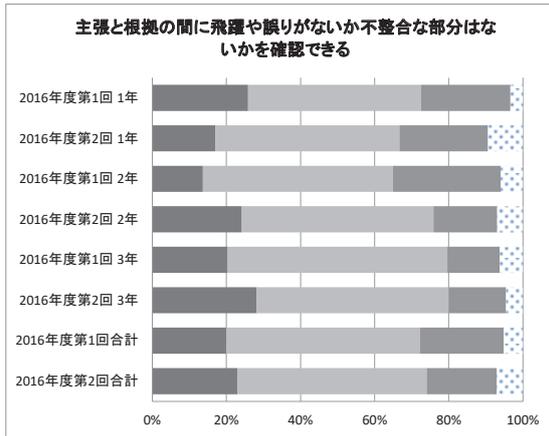
SGH意識調査 アンケート項目

項目名	
1. 取り組み全般・教養	
1	1(1)SGHの取組は、面白そう
2	1(2)今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質
3	1(3)海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい
4	1(4)-1 幅広い教養、進路選択に有効「教養基礎」
5	1(4)-2 幅広い教養、進路選択に有効「選択基礎」
6	1(4)-3 幅広い教養、進路選択に有効「附属高校生向け公開授業」
7	1(4)-4 幅広い教養、進路選択に有効 文理選択をせず学習を行えるカリキュラム
8	1(4)-5 幅広い教養、進路選択に有効 留学生との交流事業
9	1(5)自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたい
10	1(6)SGHの取組は、大学の専攻分野の選択に影響を与える
11	1(7)国際化に重点を置く大学へ進学したい
12	1(8)可能であれば、高校生の時に留学したい
13	1(9)可能であれば、大学生の時に留学したい
14	1(10)可能であれば、海外の大学に進学したい
15	1(11)-1 海外に語学留学(研修)をしたことがある
16	1(11)-2-1 滞在先
17	1(11)-2-2 期間
18	1(11)-3 海外に旅行をしたことがある
19	1(12)-1 「e-ラーニング」を活用できれば使ってみたい
20	1(12)-2 「e-ラーニング」を使用したことがある
2. 現代の社会の課題に対する関心	
21	2(1)「総合的な学習の時間」を通し、現代社会の諸課題に関心を高められる
22	2(2)現代社会の諸課題に対する興味・関心のある課題
23	2(3)現代社会の諸課題について、もっと学習したい
3. 課題を発見し解決する力	
24	3(1)自主的に探究課題を発見できる
25	3(2)必要に応じて他者と協力して活動を進められる
26	3(3)課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ
4. 英語を活用する能力	
27	4(1)英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい
28	4(2)-1 トピックが身近であれば、長い話や複雑な議論を英語で理解できる
29	4(2)-2 標準的な英語であれば、ネイティブ同士の会話の要点を理解できる
30	4(2)-3 文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる
31	4(2)-4 関心の高いトピックを、辞書を使わずに読み、相違点や共通点を比較できる
32	4(2)-5 綿密な読みが必要な場合、読む速さや読み方を変えて、正確に読める
33	4(2)-6 なじみのあるトピックなら、ニュースの要点について、英語で議論できる
34	4(2)-7 学んだトピックや興味や経験の範囲内なら、抽象的でも議論できる
35	4(2)-8 事前に用意されたプレゼンテーションを流しように行え、質問にも対応できる
36	4(2)-9 デイバートなどで、トピックが関心のあるものであれば、主張を明確に述べられる
37	4(2)-10 そのトピックについて知っていれば、まとまりのある文を書ける
5. 論理的な思考力	
38	5(1)-1 議論や考察を繰り返しても、課題や主張を見失わずに把握できる
39	5(1)-2 事実であれば、客観的なものであるかを意識してより確かな推論や根拠を立てることができる
40	5(1)-3 主張と根拠の間に飛躍や誤りがないか、不整合な部分はないかを確認できる
41	5(2)-1 議論や考察を繰り返しても、課題や主張を見失わずに把握できる
42	5(2)-2 事実であれば、客観的なものであるかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる
43	5(2)-3 相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる
44	5(3)論理的な思考力を高めたい
45	5(4)論理的な思考力を身に付けることは将来の役に立つ
6. プレゼンテーション能力	
46	6(1)探究の成果や解決策の提案、意見などを効果的に聞き手に伝えられる
47	6(2)プレゼンテーション能力を高めたい
48	6(3)プレゼンテーション能力を身に付けることは将来の役に立つ
7. ICTを活用する能力	
49	7(1)目的やデバイスや機器の特徴に応じ、適切に選択し使用できる
50	7(2)ICTを活用する能力を高めたい
51	7(3)ICTを活用する能力を身に付けることは将来の役に立つ
52	8『持続可能な社会の探究Ⅰ』で選んだ講座

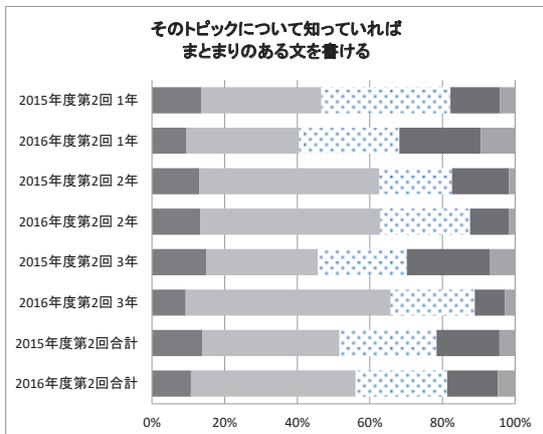
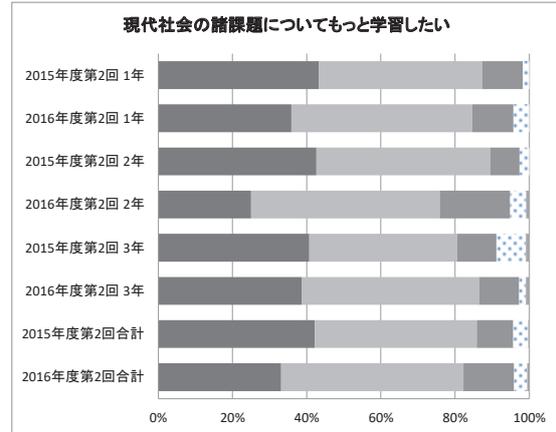
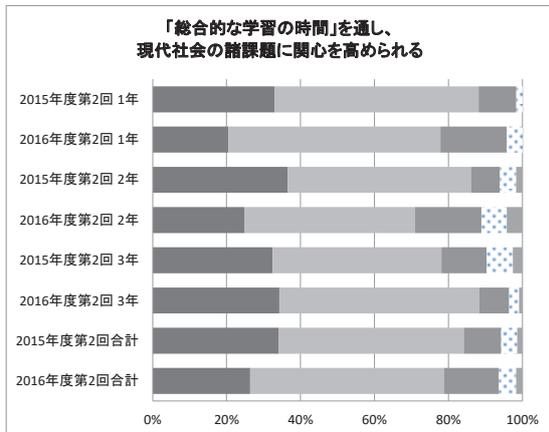
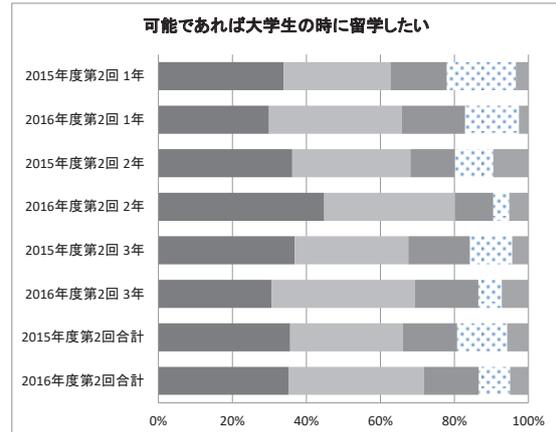
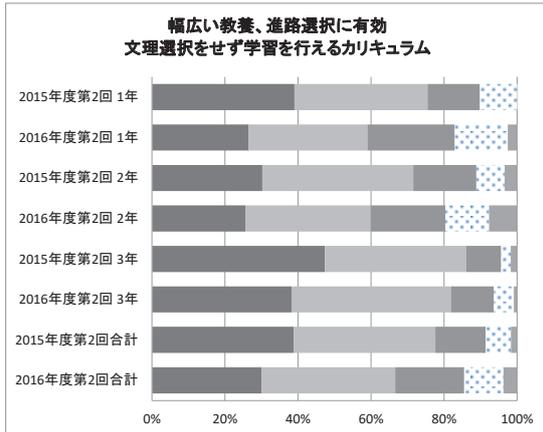
SGH意識調査 集計結果 今年度過回比較 2016年4月(2016年度第1回)ー2017年1月(2016年度第2回)

■①大変そう思う ■②ややそう思う ■③どちらとも言えない □④あまりそう思わない ■⑤全くそう思わない





SGH意識調査 集計結果 前年同回比較 2016年1月(2015年度第2回)－2017年1月(2016年度第2回)



教育課程表

平成27,28年度入学生用

教科	科目	1年		2年		3年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	4		2		2	
	国語B			2			2
	国語表						2
	国語A						1
	国語「I」	2					
地理史	地理史A			2			4
	地理史B			2			4
	地理史B						3
	地理演習	2					1
	地理演習						
公民	政治・経済	2				2	
	公民演習						2
数学	数学I	3		3			
	数学II						6
	数学A	2					2
	数学B			2			2
	数学「I」	1		1			
理科	理科基礎			2			1
	理科基礎	2					5
	理科基礎						1
	理科基礎			2			5
	理科基礎	2					1
保健体育	保健体育	2		2		3	
	保健体育	1		1			
芸術	音楽I	2		2			
	音楽II						2
	音楽III	2		2			
	美術I						2
	美術II						
外国語	英語I	4		4		2	
	英語II						2
	英語III	1					2
	英語「I」	1		1			
	英語「II」						2
家庭情報	家庭総合	1		2		1	
総合的な学習の時間	社会と情報	2					
	持続可能な社会の探究			2		1	
ホーム	ホーム	1		1		1	
計		35		35		12	7~23

平成 26 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 3 年次
研究開発実施報告書

平成 29 年 3 月 18 日

発行 国立お茶の水女子大学
附属高等学校

〒 112-8610 東京都文京区大塚 2 丁目 1 番 1 号
電 話 03 (5978) 5856 ~ 7
F A X 03 (5978) 5858

印刷所 株式会社 甲 文 堂
〒 112-0012 東京都文京区大塚 1-4-15
アトラスタワー茗荷谷 105
電 話 03(3947)0844